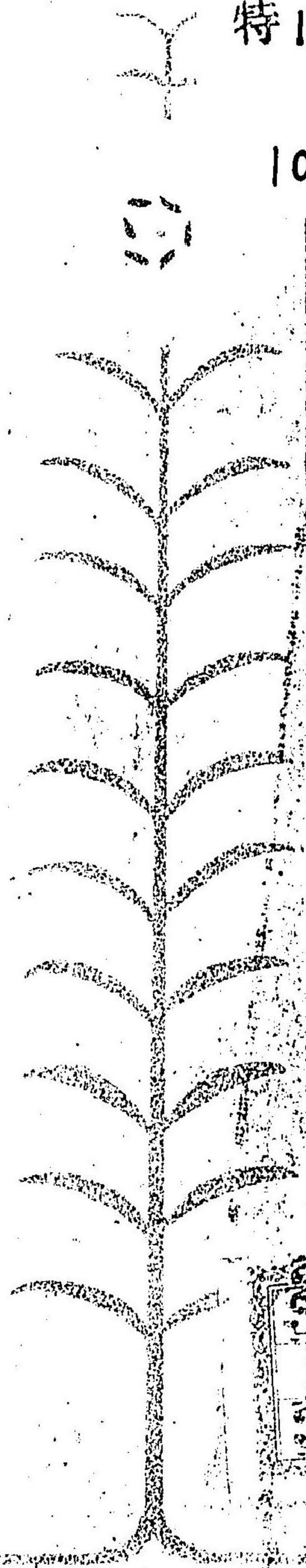


3E54

實用
新書
翰文

特19

106



Small vertical text or markings at the bottom of the decorative border.

緒言

わが國の文章は、今、そのおそろしい混亂のありさまにあることは、人のよく知るところである。そして、有識者の、常になげいてゐるところである。その中でも、ことにひどいのが、今日の書翰文である。

一方には、ひどくふるい、形式一點張の候文があり、一方にはまた、ひどく突飛な體をなさない言文一致文がある。とんと、その標準がない。従つて、これを學ばうといふものは、殆ど、その適從するところを知らないといふありさまである。

本書は、聊か以て、この上に貢献するところあらうといふ趣旨で著されたものである。して、それは、新しい、しかも、実用的な書翰文を世に進めようといふ考であつたのだ。但し、そのこれを學ばれるであらう、讀者諸君を、一般の青年諸君と見なしてかゝつたものであるから、その實用といふことは、おのづから、その上に極限されてゐるのである。なほ一つ、書翰文は、どこまでも情味を生命のものと、自分は考へるので、そのいはゆる實用なることばは、おのづからまた、その特殊の意味を寓せられた傾になつてゐる。

要は、今日に用ゐらるべき新しい、して、その體を得てゐる書翰文を諸君におすゝめしようといふのである。のつもりで見てもらひたい。

明治四十五年五月

著者

目次

一、實用新書翰文の作法注意一般……………一

一、書翰文の現状……………一

二、候文體の書翰文（その一）……………五

三、候文體の書翰文（その二）……………八

四、候文體の書翰文（その三）……………一五

五、口語文體の書翰……………一八

六、まじめな書翰文……………二三

七、あらはし方の相應……………二六

二、文例……………三五

一、仙臺にて……………三五

二、青森から……………三六

三、函館にて……………三九

四、大沼公園から……………四一

五、札幌から……………四三

三、故郷から……………四五

一、第一信……………四七

二、第二信……………四八

はじめ東京へ来て(友人に)……………四八

一、アト、ゼ、ステーション……………四九

二、街上より……………四九

三、下宿屋へ着いて……………五一

北國より友へ……………五三

その一……………五三

その二……………五四

旅にて……………五五

月の夜友へ……………五七

櫻の木のもとより……………五九

旅行先より歸宅せる友人へ……………六〇

津輕海海峽より……………六一

夏の海岸から……………六二

選手だつた人へ……………六六

中途退學をせし親友へ……………七〇

S生よりK生へ……………七六

K生よりS生へ……………七六

その一……………七六

その二……………七七

その三……………七八

その四……………七九

その五……………八〇

その六……………八〇

その七……………八二

故郷の父に……………八四

歸郷を報ず……………八七

歸京を報ず……………八八

入學を報ず……………八九

安着を報ず……………九〇

出産を報ず……………九一

右返事……………九三

入營を報ず……………九四

その一……………九四

その二……………九五

右返事……………九六

その一……………九六

その二……………九七

試験合格を報ず……………九八

右返事……………九九

死去を報ず……………一〇〇

轉居を報ず……………一〇一

同返事……………101

作文の點が悪いから……………103

右返事……………104

不合格をしらす(親友へ)……………106

入院を報す……………107

退院をしらす……………110

梅見に誘ふ……………111

花咲く頃をしらす……………113

花見に誘ふ……………114

舟遊に誘ふ……………116

避暑に誘ふ……………117

紅葉見に誘ふ……………118

雪見に友を誘ふ……………119

芝居見物に誘ふ……………121

温泉場へ誘ふ……………123

觀兵式拜觀に誘ふ……………124

學術講演會に誘ふ……………125

右返事……………126

新年宴會に友を招く……………127

花の盛りに友を招く……………128

右返事……………130

菊のさかりに……………131

新築落成に人を招く……………131

右返事……………134

悴の婚禮披露に人を招く……………一三五
 誕生日に友を招く……………一三六
 右返事……………一三七
 壽宴に人を招く……………一三七
 鎮守祭禮に友を招く……………一三八
 かるた會に人を招く……………一四一
 親類を招く(車夫に持せて)……………一四三
 歸朝祝に人を招く……………一四四
 床あげに人を招く……………一四五
 右返事……………一四六
 大祭日に人を招く……………一四七
 右返事……………一四八

急に人を招く……………一四九
 法會に人を招く……………一五〇
 醫師を招く……………一五〇
 その一……………一五〇
 その二……………一五一
 大工を呼ぶ……………一五二
 觀月の宴を催す……………一五三
 送別會を催す……………一五三
 夜學會を催す……………一五五
 朝鮮へ行く人を送る……………一五六
 年始狀……………一五六
 その一……………一五六

その二……………一五六

その三……………一五九

暑中の見舞……………一五九

右返事……………一六〇

寒中の見舞……………一六一

右返事……………一六三

洪水見舞……………一六六

右返事……………一六七

病氣の見舞……………一六八

右返事……………一六九

火事見舞……………一七〇

右返事……………一七〇

父を喪ひし友に……………一七一

その一……………一七一

その二……………一七二

初節句を祝す……………一七四

右返事……………一七五

家督相續を賀す……………一七七

右返事……………一七九

友人の來訪を謝する文……………一八〇

右返事……………一八一

議員の當選を祝す……………一八三

開店を祝す……………一八四

右返事……………一八六

就職を賀す……………一八七

その一……………一八七

その二……………一八八

旅行中の御禮……………一八九

饗應の御禮……………一九〇

周旋の御禮……………一九一

會葬を謝す……………一九二

兩貝を返すに添へて……………一九三

歳暮の贈物に添へて……………一九四

梅を送る……………一九五

果物を送る……………一九六

手土産を贈る……………一九八

種物を贈る……………一九九

手傳を頼む……………二〇〇

茶を贈る……………二〇〇

右返事……………二〇一

義損金を贈る……………二〇三

仕立物を届く……………二〇四

學資金を送る……………二〇五

右返事……………二〇六

寫真を送る……………二〇七

右返事……………二〇八

寫真をもらひに……………二〇九

右返事……………二一〇

預り物を届く……………二二一
 依頼せられたる買物を届く……………二二二
 見本を送る……………二二四
 忘れ物を届く……………二二四
 右返事……………二二五
 送致物の著否を問ひ合す……………二二六
 右返事……………二二七
 遺失物を問ひ合す……………二二七
 難船を問ひ合す……………二二八
 害虫の驅除を子に問ひ合す……………二二九
 石鹼の試験法を問ふ……………二三一
 汽船出帆の時間を問ひ合す……………二三三

右返事……………二三三
 米の相場を問ひ合す……………二三三
 右返事……………二三四
 身元を問ひ合す……………二三五
 割引を照會す……………二三六
 在宿を望む……………二三七
 右返事……………二三八
 忘物の送致を依頼す……………三三九
 添削を乞ふ(先生へ)……………三三〇
 壁畫の揮毫を乞ふ……………三三一
 英學の教授を依頼す……………三三一
 右返事……………三三三

乳母の周旋を頼む……………二三四

右返事……………二三六

自著の批評を頼む……………二三七

保證を頼む……………二三八

缺席届を頼む……………二三九

わが子の監督を頼む……………二四一

弟へ訓戒を頼む(兄より)……………二四三

逃亡人のことを伯父に頼む……………二四五

金子借用を願ふ……………二四七

上京せむとして……………二四八

筆記を借りに……………二五一

右返事……………二五二

友人を紹介す……………二五三

青年會に加盟を勧む……………二五四

右返事……………二五五

義損を勧誘す……………二五六

右返事……………二五八

遊獵を勧む……………二五九

周旋せし貸金の催促……………二六〇

妻を離婚せんとする親友へ……………二六二

右返事……………二六三

在京の友への忠告……………二六三

放蕩なる友へ……………二六五

洋行せむとして(外國なる友へ)……………二六七

田舎の町より(都の友へ)……………二六九

都會の妹に(田舎の兄より)……………二七一

雜誌を送つてくれた友に……………二七二

端書だより……………二八〇

一、研に腰かけて……………二八〇

二、今日の豫定は十六里……………二八一

三、下田港より……………二八二

四、船員となりし日に……………二八三

上京せんとする友に……………二八三

兄とたのむ舊友に……………二八六

旅に出た兄に……………二九〇

森林から……………二九二

木蓮咲く日に……………二九四

開店第一日に……………二九五

兄の病状をしらす……………二九八

病床より……………二九九

父の看病を頼みたる人へ……………三〇二

目次終

實用新書翰文

内海月杖著

書翰文の作法注意一般

一、書翰文の現状

わが國の文章は、今日、そのおそろしい混亂のありさまにあるのである。

まづ、これを文體の上からいふても、文語文體と口語文體の二體が、相並んで行はれてゐる。そして、その文語文體が、また、いろいろの文體——たとへば、擬古文體

書翰文の現状

一般文章の現状

一、書翰文の現状

一

現代文章の文體の種類

もあるし、漢文直譯體もあるし、歐文直譯體もあるし、普通文體もあるといふやうに、いろいろの文體にわかれてゐる。のみならず、その普通文體といふ、普通一般の用文章がまた、ちやんと、一つに定つた文體ではないのである。

普通文は、一にまた、時文といひ、今文といひ、もしくは現代文と呼ばれてゐる。しかし、その時文といひ、今文といひ、もしくは現代文といふのは、たゞ、現代の人、今の人、人が書く文章といふ上からの名であつて、その體が、ちやんときまつてゐて、その上に命名された名ではないのだ。従つて、その書く人のおもひおもひで、そこにはいろいろの文章があらはれてくるのである。實にこ

まつたことであると思ふ。

書翰文も、同じく、この例に漏れることはできないので、やはり、その文體が、いろいろになつてゐるのだ。

その文體の上からいふと、やはり、外の文章と同じやうに、文語文體、口語文體の二體がある。そしてその文語文體の中には、候文體と普通文體との二體が、また、わかれてゐるのだ。尤も、その普通文體の書翰文は、その例が、極めて乏しい、むしろ、特殊の文章に屬すべきものである。だから、くるめていへば、まづ候文體と口語文體との二體があるといふてよからう。

ところで、その候文體といふのは、諸君の知つてをられる通り、昔から長く用ゐられて來た文章で、その上に

書翰文の文體

候文體と口語文體と候文體

は、一つのきまりきつた型ができてゐる。それを今日でも多く、そのまゝに襲踏してゐるので、あまりにふるくさくて、とかく清新の氣に乏しい。口語文體の方はまた、その文體が、ごく新しく、そして、その體がきまつてゐないので、何だか、おちつかない傾がある。かやうな次第で、一方は、ひどく舊式、一方は、ひどく新式で、その背馳が、あまりに甚しいものである。そして、そのために、どうも、この書翰文といふものが、うまいかないのである。従つて、これを學ぶものは、その大きな困難を感じる次第になるのである。

この困難を救ふに、實用的な、しかも、新しい書翰文を諸君におすゝめしようといふのが、すなはち、本書の目的であるのだ。

それには、何でも、適當の文範を示すに限ると思つて、本書は、その文範を示すことに、重きをおいたのである。しかし、その文範を味つてもらふには、やはり、その上の用意があるので、まづ、その前に、少しく、作法の一般について、の注意を述べることになしよう。

二、候文體の書翰文 その一

一體、わが國の書翰文は、そのはじめ、奈良朝時代に漢文の尺牘に倣ふて、書きはじめたのが、その起であつて、全く、漢文で書いたものである。その後、平安朝時代に、なつて、假字がきの文章ができ、書翰文も、その假字書き

候文體の書翰文
書翰文の發達の歴史

消息文

の文章で書かれるやうになつた。いはゆる消息文といふのがそれだ。しかしそれは専らうちとけた間のうちとけた書翰文に限られて、一般には、やはり漢文の尺牘流の書翰文が行れてゐたのである。

しかるに、宇多天皇の時に遣唐使がやめられて以來漢文は頓に衰へて、その正格の漢文を書く人がひどく少くなつた。そして、それにつれて、一種の妙な文章——純粹の漢文ではなく、國語をそのまゝ用ゐて漢文にうつし、轉倒をつけたもの、いひかへれば、日本自己流の漢文みたやうな文章が發達して來た。その當時、あの記録文といはれたものなどは、みな、それで書かれた。それから鎌倉時代になつては、その妙な文章が、武家の

往來體

候文體

公文として用ゐられ、それが、又書翰文の上にも用ゐられて來て、前時代の尺牘體のものと混和して、ここに一種特殊の書翰文ができた。これが候文體のはじめで、世に往來體と呼ばれたものである。その往來體は、すべて、前にいふた、その妙な轉倒によつた漢文風のものであつたが、それが、また、その後、それに假字を交へることとなつて、室町時代頃から、だんだん、それが用ゐられて、その後、幾多の變遷を経て、江戸時代になつて、遂に、今日見るやうな、候文體の書翰文が定つたのである。

明治になつて、更に、多少、その調子のかはつたこともあるが、その大體は、まづ江戸時代の候文と、さう大したかはりはないのである。

候文といふ名

三、候文體の書翰 その二

候文體といふのは、『候ふ』といふ敬稱の助動詞を用ゐて、文を行ふ故に呼びなされる名である。すべて、句の終におく助動詞は、どうも、きまりのむづかしいものである。そして、さう、同一の助動詞を何度も、くりかへして用ゐるわけにはゆかぬものである。たとへば、『なり』とか、『たり』とかいふやうな助動詞を用ゐるとして見給へ。それが、二度も、三度もくりかへされる日には、耳にさはつてしようがないではないか。ところが、あの『候ふ』といふ助動詞は、多年の慣用で、いく度もくりかへされても、さう耳にさはらず、そして、又、うま

候文體の型

く、さまりがつく。それが、この候文體の一つの特長である。

さて、前述べた通り、この候文體は、その長い歴史をもつてゐて、その型が、ちゃんと一定してゐる。それで、今日でも、多く、そのきまつた昔の型によつて、書く人が多い。又、さう書かなければならぬと心得てゐる人があつて、いや、さうしななければ、候文にならぬといふやうに教へる人があるのだ。

たとへば、

一筆啓上仕り候。時下、春暖の候、まづ以て、貴家、ますます御清榮、賀し奉り候。従つて、當方、一同無事消息、まかりあり候。御安心下されたく候。さ

型に囚れてはこまる

て陳ぶれば……

といふやうにやるのだ。これは、あながち、わるいわけではない。型にはまるといふことは、ちよつと、その要領が得らるゝものである。しかし、いつも、それでは——
 どういふ場合でも、少しも、その場合を顧みずに、いつもこれでは、文章の味もなければ、趣もない。先方へ對して、情をはこぼうといふにしても、又用をはたさうといふにしても、それが、適切に、先方の胸へは傳らない。つまり、書翰文の目的を達することができないのである。で、これは、一つ工風して、その調子を新しくするやうにしなければこまる。『候ふ』といふその用語は、便利だから、これを生して、うまくはたらかせるやうにするが

新しい候文

いゝのだ。そして在來の型にならつて、いつも千篇一律の文章を書くといふことを避けなければならぬ。それから、その在來の型に囚れるといふ弊と伴ふて候文を書くのに、その昔の妙なくせが残つてゐてこまるものがある。

轉倒のくせ

その第一は、轉倒である。

たとへば、

- 奉_{ぞん}存_{ぞん}候ぞんじたてまつりさくらふ
- 被_{おほ}思_{しめ}召_め度_{たくさ}候おほしめされたくさくらふ
- 呈_{いっ}一_{しよ}書_{しよ}候いっしよをていしさくらふ
- 奉_{おし}賀_{たてまつり}候おしたてまつりさくらふ
- 被_{くだ}下_{されたくさ}度_{たくさ}候くだされたくさくらふ

といふやうな例。これは、前に説明した通り、この文體の書翰文のはじまる當時例の往來體で、漢文のまねを

送假字の無視

して書いた、そのくせが残つてゐるのである。當時に
おいては、これで、漢文らしく見せるといふ必要もあつ
たらうが、今日では、何も、そんな、妙なまねをする必要は
ない。もともと、漢文ではなく、勿論、國文ではない、一種
鵝的（カモ）のものであるから、せひ、やめるやうにしなければ
ならぬ。これを、かう書くのが、候文の體であるといふ
やうに考へてゐる人、たちもあるやうだが、とんでもな
いおもひちがへである。

第二に、その同じ、漢文に見せる爲に、やった、妙に假字
送假字を省くくせが、まだ、残つてゐる。

陳者（陳）陳れば

進呈仕候（進呈仕り候）

申上候（申し上げ候）

といふやうな例。これも、無意味のことであるし、それ
に、場合によつては、意味のわかりにくくて、こまる場合
も起るから、——たとへば、『存じ候は』といふやうに書
くと、『存じ候はば』だか、『存じ候へば』だか、わからぬと
いふやうな場合も起るから、せひ、ちゃんと送假字を送
るやうにしなければならぬ。但し、句の終の『候ふ』だ
けは、『ふ』といふ送假字を略してもよからう。

第三には、あて字が、非常に多く用ゐられることにな
つてゐる。これも、やはり、漢文らしく見せるために、無
理に假字を避けた、そのなごりである。

たとへば、

あて字のくせ

下され度く候(たく)

左様に候へ共(さやう)——ども

御機嫌宜敷(よろしく)

目出度(めでたく)

といふやうな例。これも、猥雑きはまるものであるから、せひ、改めて、そんな妙なあて字をしないやうにしなければならぬ。

以上は、おもに、綴字の上の問題で、さう大したことはないやうに思へるかも知れぬが、事實、さうでなく、これが爲に、知らず識らず、文章の趣をも害するやうになるものであるから、切に、その注意を望む次第である。

四、候文體の書翰文

その三

かう、前のやうに、わるい、ふるいくせを改めるが、いといふと、諸君は、或は、何でもかでも、在來の形はわるいのかしらと、おもひこまれるかも知れぬが、いや、決してさう、何から何まで、すべて、棄てろといふのではない。そのいゝところは、やはりそのまゝ、保存するが、いゝ。

あの、この文體に特有な接續詞の「間」とか、「ところ」とか「條」とかいふやうなものは、勿論、そのまゝに用ゐてよろしいのだ。

それから、この文體に限って、動詞の語尾を略することがある。

昨夜無事歸宅(帰宅す)、御安心下(下されたく候)。

候文體に特有な接續詞

動詞の語尾の省略

明日晩頃參上參上し、もしくは、參上いたし、拜顔の上、萬々申し述べべく候。

といふやうな例。これも、このまゝにて、少しもさしつかへはない。候文體の簡明に書ける一特長である。

それから、文のはじめに『謹啓』とか、『啓』とか、『啓上』とか、『拜啓』とかいふ敬語をおき、文の終に、『頓首』とか、『勿々』とか、『不宣』とか、『不』とかいふやうに、同じく敬語をおく例、あれも、勿論、そのまゝでよろしい。尤も、これは場合によつて略することもある。

それから、つけ加へて、もう一つ、注意を述べておかう。外ではない、敬意の適當といふことである。これは、ひとり、候文體に限つてのことではなく、書翰文

起首と結尾と

敬意の適當

全體にわたつてのこととて、一つの必要な用意であるのだ。すなはち、われわれが、先方の人に對して、情をはこぶのに、そのはこび方が、適當でなければこまるといふことである。それで、丁寧を期すると、ともすると、ばか丁寧になり、従つて、そろそろしくなり、親みをあらはさうとすると、とかく、ぞんざいになり、なれなれしくなるものである。それではこまる。その先方の人に對する關係の如何によつて、その適度の敬意があらはれるやうに心がけるのが專一である。それが候文では、とかく、ばか丁寧になり、そろそろしくなりがちのものであるから、よく注意してもらはないとこまる。

口語文體の書翰文

五、口語文體の書翰

口語文體といふものは、ごく近くに發達した文章である。して、それを書翰文の上に用ゐられるやうになつたのは、なほ更ごく近くのことである。しかし、この頃では、大分この文體の書翰文が多く書かれるやうになつてきた。

ところで、世間では、この口語文體は、どうも工合がわるい、口語文の書翰文はよくないものだといふやうにいふ人がある。

その一部の人は、大に、在來の候文體の型に囚れてゐる人で、何となくすかぬといふが、はのもの、一部の人はその相當の長所を認めて、ある場合にはいゝと考へな

がらもある場合——たとへば、敬意をつくさうとか、まじめに書かうといふ場合には適しないと考へるがはのものである。

しかし、これは、さうではないのだ。自分は、口語文の書翰文が大によろしい、書翰文の目的に最もかなつたものだと思ふ。

一體、書翰文といふものは、もともと、われわれが、對談にかへて用ゐる贈答往來の文章であるのだ。その對談にかへるといふ目的の上からして、口語の文體が最も、その體を得たものだといふことは、誰でも、すぐわかることではないか。

前いふた通り、わが國の書翰文は、そのはじめ、漢文の

書翰文の性質書翰文の目的

女子の書翰文

尺牘にまねて作りはじめたといふごとく、自然でない
 發達の歴史をもつてゐる。従つて、在來の候文には、ど
 うも、その對談にかへるといふ書翰文の第一義が輕視
 される傾がついてまはつてゐるのだ。
 現に、女子の方の書翰文は、平安朝時代に、男子のその
 尺牘風のものとは別に、當時の口語を、そのまゝに書きな
 したといふ發達の歴史があつて、その當時の女子の書
 翰文は、男子のに比して、頗る、生氣に富んでゐたもので
 あつた。

尤も、口語といふたとて、日常の會話をそのまゝでは
 ない、そこには、それを多少文章化するといふ巧を寓せ
 られるが、しかし、それにしても、候文よりは、生氣が

口語文では敬意がつく
 せないといふ感じ

あるわけである。

一方、口語文では、どうも、敬意がつくせない従つて目
 上の人にでもあてる場合には、工合がわるいといふの
 は、實際無理ならぬ考である。が、これも、われわれが、ま
 だ、口語文に馴れないため、ちよつと、さういふ感じがす
 るのであらう。おひおひ馴れるやうになれば、やがて、
 その感じはなほることだらうと思ふ。

既に、一方他のすべての文章でも、口語文が、やがて、一
 般の普通用文章とならうとする傾向を示してゐると
 ころであるから、やがては、書翰文も、同じく、口語文で
 かり書かれるやうになることであらう。

但し、候文にも、また、その特有のいゝところがあるか

二體の併立

ら、さう一概に棄て、しまふわけにもいかぬ。まづ今日のところ、やはり、この二體をならべ用ゐるがよからう。

して、又、口語文の書翰文が、一定の形にきまるまでには、まだ、そのいろいろの變化をし、種々の進歩を経なければならぬのはいふまでもない。

六、まじめな書翰文

以上、候文の書翰文と口語文の書翰文とについて、そのあらましを述べたから、これから更に書翰文一般の上について、その注意を述べることになしよう。

まづ第一に自分は、まじめな書翰文といふことをす

まじめな書翰文

すめたいのである。

まじめな書翰文といふと、ちと、まじめといふ用語がぼんやりしてわかりにくいかも知れないが、つまり形式にかゝはらない、形式一點張でない、ほんとの書翰文を書くやうにこのことである。

前いふた通り、書翰文は、先方の宛人に對して、情をはこび、用をはたさうといふものである。すなはち、その種類からいへば、

- 一、むねと、親愛の意を表するに用ゐるもの。
- 一、むねと用事をはたすに用ゐるもの。
- 一、用事をはたしかねて、親愛の意を表するに用ゐるもの。

書翰文の種類

書翰文は情の文章である

といふやうにわかれよう。しかし書翰文の性質として、このむねと用事をはたすといふ場合にでも、われわれは、決して、その情味を疎外することはできないのである。すなはち、この點において、書翰文は情の文章であるといふても、さしつかへはあるまい。

さて、そこで、その情をつくすに當つて、われわれは、在來、とかく、そのほんとの情をつくすことをしないで、ともすると、情を偽つて、かざりの多い、もしくは、情のこもらぬ文章を書くといふくせがついてゐる。

これがわるいといふのだ。

自分の、こゝに、まじめな、ほんとの書翰文といふたのは、その情を偽り、もしくは、情のこもらぬといふ書翰文を書かないやうにしなければならぬといふ注意である。

自分は、嘗て、高楠文學博士が英國人の友義を重んずることについて物語られた中に、次のやうなことがいふてあるのを、ある新聞で讀んで、ひどく感心したことがある。

英國人の書翰文の例

英國人は、遠隔の地に相別れても、常に寫眞の交換書狀の往復をなし、以て、音信を通ずるなり。もし一方が書狀を、他の一方の人に送りて、返事の來らざる時は、必ず、何故に、返事を與へざるかと詰問するの書狀を發す。しかして、その書狀の書きぶりには、わが國及び大陸諸國民の書狀と全く異にして

さし當りの用事を記したるもの殆どなく稀には用事を記することもあるも極めて僅少なるものに過ぎず。まづ自己の身體の状況より業務のありさまに及ぶを常とし、その業務中に種々の出来事あれば、一々明細に記載し、これに對する自己の意見を述べ、つぎに妻の日常の状況を記し、もし旅行にてもなしたる時は、その旅行に關する記事を入れ、つぎに子供の安否動作について精細に記し、ひいて庭園における花卉草木のありさまより、家内のさまに至るまで、逐一もらさず報道するを以て、いかなる遠隔の地に離れをりても、朋友の日常の動靜、その家庭のありさまは、手に取る如く判然

して、毫も遺憾なく、まのあたり、その人に面接するが如き思をなすことを得るなり。されば英國人は、朝夕、この種の書狀に接するを喜び、もし郵便配達夫が書狀を持參したる時は、家人は競うて、自己にあてたる書狀のあるやなきやを検す。

自分にはわが國でも書翰文は、どうかかういふ風にお互に書くことにしたいと思ふ。

われわれは、一般の文章を書く上に、とかく文章を文字の上のものとはかり心得てしまつて、何でも綺麗な字句をつらねるに限るといふやうに考へ、徒に字句の修飾にのみ走つて、その内容を遺れるといふくせがある。それが書翰文を書く時にも、つひつさまとつて、や

はり、見えをして書く。あれが、ごくわるい。
自分が、ほんとの書翰文を書くやうにしなければならぬとすゝめるのは、すなはち、こゝである。

七、あらはし方の相應

あらはし方の相應

次には書きあらはし方の相應といふことである。むづかしいことばでいへば、表彰の適切といふことである。

尤も、これは、ひとり、書翰文の上ばかりの問題ではない、どんな文章にでも必要な用意であり、必要な要件であるが、それが書翰文においては、特に必要なものである。外の文章では、ある特別の場合を除くの外は、その文章を

書翰文の讀者

章を讀まるべき範圍、いひかへれば、その文章の讀者は一定してゐない、また、多人數である。ところが、書翰文の場合では、ある極めて特殊の場合を除くの外は、その讀者は、ちゃんと一定してゐる、たゞ一人の宛人であるのだ。

これは、一方から考へると、ひごとく、書翰文の書きいゝところであるやうに見える。といふのは、その一定の宛人といふのは、多くの場合、知りあひの人である、たとひ、知りあひの人でないにしても、どういふ人だといふことは、ちゃんとわかつてゐる。すれば、そのわかつて居る人に向つて、情をはこび、用をはたさうといふのは、まことにやりよいやうにおもへる。

七、あらはし方の相應

が、よく、一方から考へて見給へ。決して、さうらくではない、いや、極めてむづかしいといふことがすぐわかる。なせといへば、その先方の宛人の如何によつて、それはこぶ情にしてが、はたさうといふ用にしてが、ちやんと、その最も適當なる形においてあらはし出されなければならぬではないか。外の文章では、一般の標準に従つて、わかるやうに書きあらはせば、それでいいのだ。それでわからないといふのなら、讀者の方がわかるのだ。かういつてすましてをられる。ところで書翰文の方では、さうはいかぬ。わかるやうに書いておいて、それでわからないのは、先方がわかるのだといふてすましてはをられない。どうしても、そのはこば

うといふ情は、そのまゝに、ちやんと向の人の胸にしみ通り、このはたさうといふ用事は、この通りに、ちやんとはたさしてもらはなければこまる、さうなくては、その目的を達することができないのだ。

さあ、かうして見給へ。書翰文において、その書きあらはし方のことに適切でなければならぬといふことは、よくわからう。しかも、そのむづかしい困難なことであるといふことも、よくわからう。

くりかへしていふが、書翰文は、もと、對談にかへて用ゐるものである。對談の場合では、多少話がへたといふても、ことばの調子や何やで、どうやら、その意味は通じる。が、それが、書翰文となり、文章となつては、さうは

書翰文の困難

いかぬ。そこに、あらはし方の適切が要求される次第であるのだ。

あらはし方の適切といふことは、他の文章の上におけるのと同じやうに、まづ第一に、その明晰といふことを必要とする。

明晰といふのは、文意のはつきりとしてゐることである。して、そのためには、一方、そのあらはさうといふ感想が、ちゃんとまとまつてゐなければならぬ。わかりやすいへば、ことがらが前後したり、話が横道にそれたり、主題と枝葉のことがらが相混じたりして、ごたごたしてはならぬといふことである。すなはち、その感想が、ちゃんと順序立てられ、ちゃんとまとめられ

明晰
明晰の要件

てゐなければこまるといふのだ。

一方では、また、そのあらはし方のその形がうまくなければならぬ、——それには、ほんやりした用語をつかったり、妙なくどいごたごたしたつけ方をしたりしてはならぬといふのである。

第二には、あの生趣といふこと、すなはち、文章が生々として、ひとり、その意味がわかるばかりでなく、ちゃんと、このまゝの趣であらはされてゐなければこまるといふことである。

それには、前いふた、あのまじめといふ心がけが肝心である。いかなる場合にも、見えをしたり、ぶつたり、がつたりしては、文章の生趣は、決して、でてくるものでな

生趣

生趣の要件

いのだ。

その形においても同じことで、ちゃんと引きしまつた、まともまつた形でなければならぬのだ。

以上大體作法の用意をつくしたと思ふから、こゝでその上の説明を終る。

文例

汽車の中より

一、仙臺にて

急行列車の深い夜は、やうやう仙臺附近で明けました。

どんよりとした黒灰色の空は、今に雪でも持つて来さうに、低う垂れ下つて、冷い、荒つぽい北風は、容赦もなく、車窓の隙から入つて参ります。

未だ乗客の多くは、しだらな態を、クッションに横たへて居ります。何となく、いふにはれぬ寂寞を感じるので、これからもう二日も、かうやつて、捨られて

やうやう

荒つぽい

しだら

寂寞

めし

行くのかと思ふと、心細くてし方がありません。

昨夜——お別れの悲しかった事をくり返すと、めし

しいやうだが私は泣かずに居られない。涙の跡には

痛いやうに風が泌みるのです。

寒い冬が半箇年續いて、雪にうづもれて居るんだと

聞く、北海道へ流れるやうになつて行く私の心をお察

し下さい。

しんみり

呼吸す

これから長い長い間は都のしんみりとした舞妓の
歌のやうな空気が、呼吸することが出来ないんですもの。
あゝ上野を離れる時に、胸が裂けるほど江戸の空気を
を呼吸したかった。

汽車は、仙臺に止りました。

下車す

下車する人は、一人もありません。生活に疲れたと
いふ風の卑しい躰が續けられて居ます。

ドアが開かれて、脊高い髻ぶらの男が入つて来て、ど
こに腰を下さうかと、まごついて、暫くあたりを見廻し
て居りました。

まごつく

その顔には、頬骨の高い鼻の大きな、皮膚の硬い東北

人種の特徴が遺憾なくあらはれて居ます。

車が北へ進む毎に、こんな男が多くなつて行くでせ

う。

私はいま洗面に下車して、すぐこれを場内のポスト

に入れたのです。

特徴
遺憾

二、青森から

二日目に、漸く海を見る事が出来ました。

青森灣の波は静で、恐山の煙が遙に眺められます。

いよいよ、寒くなりました。野も山も原も河も、一様に白いのです。

綺麗

私は、あの雪を、どうかして味つて見たいと思つて、車窓から首を出して見たけれど、たゞ北國の膚裂く風といふのが、顔の皮を剥ぎとるやうに吹きつけた。け雪は、綺麗に吹き飛ばされて、汚い汽車の木質が、憎い位です。この汽車も、白銀造りに、雪に包まれて走つてくれ

ばいいにと思ひました。

青森の街が見え出しました。

ぼんやり

港には、五六の蒸氣船が、ぼんやりと浮いてますだけです。市街には、煙を立てる煙突らしいものは一つも見えませんが、

貝殻を伏せたやうな街だと、想像して下されば間違

がありません。

気が早い人たちは、もう下車の用意をしてゐます。

三、函館にて

目的の札幌へ直行する汽車に乗るには、未だ三十分程もありません。

汽船を降りたばかりの私は、すぐに市街を歩いて見

ました。

文

例

三九

ちようど

臥牛山といふちようど、大きな牛が寝ころんだ風の砲臺のある山からは恐しい風が吹き下されてます。

笑ひ戯る

しかし五つ六つの子供までが、道路へ出て雪をいちりながら笑ひ戯れて居ますよ。手に雪かきの小さいのを持つてるので、何といふのかと聞いて見ると、ジョン

不思議

バと答へました。不思議な名です。多分アイヌ語でせう。

印象

人々は大概厚い羊の毛の外套に、深いゴムの靴をはいて居るやうです。それが又、いかにも温かさうでございいます。

私の北海道の土を踏んだ最初の印象は、北海道の人は言葉少いが親切だといふ事と思つた程に寒くない

名物

といふ事です。もう汽車が出ます。待合室で賣つて居る名物、いかの鹽からを、この手紙と共に送りました。

四、大沼公園から

函館を出た汽車は強い風に逆つて、北へ北へと進みます。

いろいろ

いろいろな珍しい名の驛を、五つ六つも過ぎると、この停車場へ着きました。

すつかり

停車場を出ると、直ぐ公園になつてゐるんださうです。それは景色のいいところです。勿論すつかり雪に

總立ち

輪廓

はつきり

車窓

うづもれてますが、大きな沼の中を、私等の乗った汽車が、真黒い煙を吐いて走るのです。

乗客は、總立ちになつて、頻に賞めそやして居ます。

蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山が、長い裾を引いて聳えて居るのが、輪廓正しく、はつきりと、冬枯の空に浮んでます。

北海道へ入つてから、一度も雪が降りませぬ。空は絶えず、どんよりとはして居ますけれど。

大沼公園の名物は、鮎焼です。この繪端書は、公園一部を撮したもの、車窓へ賣りに來たのを求めて書きました。

五、札幌から

第三日目の夜は、もう八時を過ぎて居ます。小樽と云ふ、船の澤山泊つて居る港を過ぎて、一時間も経ましたから、もう札幌には、間もないとの話です。

列車は非常に動揺します。その度に、寝そべつて居る人たちの頭が、ぐらぐらと危くてなりません。

車内の電燈が、をりをり、またゝきをしながら、薄暗くともつて居るばかり、外は眞暗で、山やら川やら解りません。

たゞ、よつく耳を澄せると、波の音が聞えるやうです。したが、それも消えてしまひました。

風のうなりがします。この廣い廣い石狩の大原野

寝そべる

をりをり

よつく

に雪でも降って居るのでせうか。

琴似と呼ぶ聲がした。車は止りません。さうして内に乗客専務と腕に紅い印をつけた車掌が来て大聲に

「お次は札幌でございます」と告げて行きました。

いよいよ

いよいよ札幌です。

だんだん

窓がだんだん明るくなって来た。空が、火事のやうになつて焦げて居るのも見えて来ました。

片づく

人々は荷物を片づけ始めて居ます。

最後

私一人は、かうして、ノートの端へゆれながらも、親しい君へ送る汽車中にての最後の手紙を認めてゐます。

札幌札幌と、叫んでます。宿についてから詳しいお

たよりを申します。

あ！叔父の顔が見える。

汽車を下りると私も北海道の人になるんです。

故郷から

第一信

只今弟や妹に迎へられて故郷の思ひ出を限りなく續けて居ります。

去年よりは家數も多く道路も立派になつたやうです。

立派

早速

改築

君の弟君が早速訪ねて来て、
 「兄さんは、どうして歸らないんだらう」と、さもさび
 しさうに尋ねられましたよ。
 この繪端書は、改築された母校です。恥しくない建
 物です。

それから、あの美枝さんが死んだってことだ。

第二信

相變らず

昨日母校を訪れて見た。
 吉田校長は、相變らず長い白鬚を撫でて居る。
 新しい先生が二名。鈴木神野の兩先生が休職にな
 ったさうだ。

とにかく

鈴木先生はとにかく、神野先生は惜しいね。
 村から、東京へ學問に出てるのは、君と僕とたつた二
 人ぎりだらう。それかあらぬか、校長は、非常に望を托
 して居るらしい。

勿論

僕も大に吹いたわけさ。勿論君が優等を得たこと
 も話した。大變喜んでね。
 學校ばかりの名譽ではなく、村の譽だなんて、揚げて
 居たよ。

出席す

明後日は、同窓會があるんだから、僕にも出席して何
 か爲になる話でもしてくれってんだ。困ってしまっ
 た。

しかし、あの時分の同窓が、一堂に集るんだから、さっ

きつと

とおもしろいだらう。
もう一人や二人の子供のお父さんになった人も居るに相違ないさ。

歸京す

來月の三日には歸京するつもりだから、その節に詳しいお話をする。

はじめて東京へ来て（友人に）

一、アト、ゼ、ステーション

支配す

宇都宮を過ぎると、もう東京といふことが私の頭の總てを支配して、故郷のことも、忘れ難い人のことも、夢のやうに消えてしまつてゐた。

只今、上野へ着いた。

鼓動

外には、喧しい電車が休なく走つて居る。これからは毎日毎日、この音を胸に刻む鼓動のやうに、絶ゆる間もなく聞かされるのかと思へば、妙に呪はれたやうな氣もする。

ぐるぐる

停車場の中には、珍しい顔や姿をした、いろいろな人が、うづ巻のやうに、ぐるぐる忙しく歩き廻つて居る。そして、素朴な風をした薄汚い青年——僕が——待合室のテーブルによつて、かうしてペンシルを走して居るのを、嘲の色を見せて、不思議さうに眺めてる。

不思議

二、街上より

南國

つやつぱし

谷間

別種

始終

うなりを立て、後から追ふ電車の音に恐れながら車に乗って、かねての下宿へ向つた。そら、君も知つてゐる、つひこの頃まで、古川の兄さんが居た家さ。南國の空は、うれしい程はれて、軟い春風がすべてのものに驚いてゐる私の顔をなでて行く。上野公園の前へ來ると、數知れぬ櫻の木が、つやつぱい嬌笑を撒いたやうに、花を開いて居た。薄紅色の花弁の幕が、春の詩を包むやうに、連つて居るところは、奥深き山里の、谷間に一本さびしく咲けるとは、自ら別種の趣味がある。東京の花は浮つばい。東京の女は白粉をぬって居る。東京の男は、始終顔をそつて居ると見える。

いま、宿がわからないので、車夫に探さして居るところさ。

あ！自働車が、僕へ土煙を浴せて過ぎ去つた。

(フートの二階へ)

土煙

綺麗

三、下宿屋へ著いて

今漸くの思で、下宿屋へ著いた。綺麗な家だ。

二階建てで部屋が四つ。

主人は學校の教師をしてゐる。おかみさんは未だ若い。

下女が一人に、子供が一人。静でいいよ。

僕の部屋は階下の六疊で南向さ。縁についた雨

入り亂る

かりたり

風流

上等

次便

戸を開けると、白梅と八重櫻が小さい庭へ入り亂れて咲いて居る。飛石の間々には、若々しい青笹に交って時知らずの花が燃ゆるやうに紅い。ゆかしい香が、をりをりする。

壘は新しい。正面は床と六尺の押入、一方がまっ白い壁で塗つて、後は、風流な硝子障子。

まあ、僕には上等な部屋だよ。

著いたばかりだから、食物のよしあしは知せるわけには行かない。今晚のお膳には何がのぼるか、それは次便のおたのしみだ。

荷物も何にも落ち付かぬ先に、とりあへず君への一書を認めた。失禮。

北國より友へ

一、

北國の秋は、さびしいものであつた。

冬枯れた野の小路には、瘦せた瘦せた、赤い小馬が、うなだれて歩いて居ます。

あゝ、沈み行く落日の餘光よ。私は、限りない悲愁の情緒に充された胸を抱いて、その日その日を、平凡に送つてをります。

明いルナ、パークを慕ふ心には、せめても都の消息にはなやかな空想を湧したいと願つてゐるんです。

消息

情緒

冬枯れ
うなだる

心なし

君よさらばさちくいませ。
心なく北國に漂ふバカポンドはいつか、カフエブラ
ンタンに躍り上るやうな、シャンペンを抜く人である
かも知れません。
たい、その日その日を祈つて、さびしい生を送らんか
な。(冷き國の窓にて)

その日その日

二

その後はお變りありませんか。
僕は例によつて平凡と、單調の首つ引き。これがま
じめな幸福といふものでせう。
考へて見ると世の中はさまざまな奇體なものです

首つ引き

さまざま

初秋

ね。
東京のこの頃はどんなでせう。
赤い灯の初秋の都。それを思つてさへ新しい新し
い思が動きます。
君が生れた故郷は、いま寒い、荒い風が吹きながつて
冷い疎な雨がさびしくおとづれてをりますよ。
僕はしみじみ北國が嫌になりました。
花咲くと聞く春までには、僕も東京の一人となりま
す。

しみじみ

その折のことは今からお頼みして置きます。

旅にて

まつ暗
無限

知らず識らず

永久

廣い空はまつ暗だ。黒い村は長く横たはって、荒い風が野面を無限に吹きまくる。

灯を付けた。

窓に凭れて何するではなく、無意識に闇の中を眺めて居ると、耳は知らず識らず、恐しい程に冴えて、どんな微細な音でも逃しまいとして居るやうだ。

君、僕はもう都を去つて四日にもなるね。田舎のすべてのもので静けさは、永久の不動或はむしろ死そのものであるかのやうに思はれてならぬ。殊に夜になぞなつて、雨でも降ると、實際堪へ切れなくなつてしまふよ。

遠い遠い

たつた

領域

やはり

生存す

歸途

遠い遠い山の中腹と思はれる處に、たつた一つの灯が、毎夜見られる。何の灯か解りはしない。が——今夜は、それさへも見えないんだもの、全く死の領域を思はざるを得ないさ。

涙が出る。黙つても出る。

やはり駄目だ。どうしてもあの騒しいところでなければ、僕は生存して行くことができないらしい。

歸りたくなつた。明日は、晝頃の汽車で歸途につくから、宿へもそのやうに、君から傳へて置いてくれ給へ。

月の夜友へ

いふにいはれず

下宿

故郷 達者

廣い野原が紫色に霞んで、山の麓に黒く茂った森の上には、明い月が冴えて居る。軽い風が、いふにいはれぬゆかしい香を漂はして来る。詩の香とでもいつて置かうか。隣家では、例の濱子さんが、また琴を弾き初めた。私は縁を開け放して、黙つて、それを聞いて居る。東京でも、今宵の月は變るまい。

下宿の二階に、飯よりも好きだといふ、琵琶を抱いて眼を閉ぢて、小敦盛を唄つてる君の姿が、眼に浮ぶ。さう思ふと、こまかい撥の響が聞えて来るやうだ。

故郷の月を、稀には、胸に浮べ出すこともあるかい。達者で勉強してくれ給へ。

をりをりの懐しきたよりを待つてるよ。

櫻の木のもとより

なまめかし 遊々し

身振ひ 自然美

ゆらゆらと

若い白い女が、赤い前掛の端をたをって、なまめかしい聲をふるはして、客を呼んで居ます。

酒の香が、毒々しい程、うすい空気に交つて漂ひます。櫻の幹を脊にして坐つてた私は、恐しい敵にでも、おそはれた時のやうに、身振ひしました。

『自然美の破壊者！』

私の胸の血潮が、音を立て、鳴つたのです。しかし私は、やはり立ち去る氣にはなれません。

市街の高い煙突から、ゆらゆらと、黒い雲が湧き出ま

文例

ひらひらと

す——と櫻が一片ひらひらと、私の頬へ散りかゝりま
した。

旅行先より歸宅せる友人へ

啓。永々の御旅行恙なく無事御歸宅の趣何よりめ
でたく存じ上げ候。

變り目
まことに

遠路の事にてもあり、それに、時季の變り目とて、殊に、
病多き折からなれば、御道中、かげながら、御案じ申し居
り候ひしが、何の御障りもなかりしは、まことに、幸福の
ことにごさ候。
定めて、御旅草のおもしろき御話もこれあるべくと

ゆるゆる

美事
末筆

思はれ候ふ故、いづれ、兩三日中には、参上ゆるゆる御伺
ひ申すべく候。

末筆ながら、昨夜はまた、美事なる御土産をいたゞき
厚く御禮申し述べ候。

家内一同、時ならぬ正月にごさ候。

別籠は、小生、大兄、御安著の御祝までに、差し上げ候ふ
もの、珍しくは候はねど、御笑納下さらば、幸甚のいた
りにごさ候。頓首。

津輕海峽より

青森灣を離れると、急に波が荒くなつた。黒く流れ

まつ白

た親潮がまつ白い齒をむき出しては船腹へ噛みついて居る。

私は今船室を抜け出して甲板の上に立った。

空は碧く、海の色を撮したやうに澄んで居る。遙に

飛びかふ

緑色の山が見える。白い鷗が飛びかふ。

この船に、あと三時間を過したら、私の足は函館といふ港の土を踏まねばならぬのだ。

放浪す

かうして、北國の枯れた天地へ放浪せねばならぬ私の運命が恨しい。

はかなし

それからそれと、淡いはかない夢の跡をたどって行くと、知らず知らずも涙が散る。孤客

心惜

の心惜め、しと笑って下さるな。

鹽を含んだ黒い風は絶えず奮へ奮へといつて居る。

はつきり

それを黙つて聞いて居ると上野でお別れた時の懐しい君の面影がはつきりと浮んで来る。

社會の勇士として見送る！

開拓す

と、いつて下すつた君の言葉——それは私が北國の荒野を耕して運命を開拓する大なる斧である。

勇士

忘れない忘れない。私は社會の勇士である。嘆いたりして居る時ぢやない。

函館へ着いたら、またおたよりをする。(波風に吹かれながら)

夏の海岸から

煮え返る

煮え返るやうな都を去つて、こんな所へ来ました。

古蹟
幕府

避暑客

めつたに

わがまゝ

眞晝

古蹟を訪れて、松柏の響に幕府の過去を偲ぶつていふやうな心もちではありません。

こゝは鎌倉とこそは呼べ、長谷の海岸で避暑客の最も多いと思はれるところ、土用波の立つ憂はあつてもあまり、海月の泳ぐといふこともないから裸體の人が蚯蚓脹の難に逢ふことも、めつたにはありません。

今日も私はわがまゝな遊びざまをせんものと、高い砂山を越えて、脱衣場へ来て居ます。

さらさらと寄する波が、白妙の砂を黒くしては去つた跡には、眞晝の日光にきらめく貝類が、いくつもいくつも發見せられるのです。

どこの子か知りませんが、乳母が頻に氣をもむのも

のんきに
生長す

大分
ばちやばちやす

見合す

さかす、飛ぶやうに走せて、その後から乳母も肥満した體を運んで行く。そしては貝を拾つて來るのです。

實際こんな、のんきに生長した人が、沸騰した湯のやうな複雑な人生の生存競争の波中におよぎ入るんですから、人の子たるもの責任また難しです。

肉色の水著を著した十一ばかりの少女と、十ばかりの男の子と、八つばかりの女の子とが、大分早くから、ばちやばちやして居ましたが、もう嫌になつたと見えて、砂を蹴つて、こゝへ入つて來ました。

知らない私が居るものだから、恥しさうに顔を見合して居たが。

『ねえちやん、あたい今日は、およげたわね』

ほゝむむ

と、一番小さいのがいひますと、
『あれは、おさる泳ぎといふんですわ』
と、姉らしいのが、ほゝゑるんで返事をすると、男の子は側から、

駄目

『ねえちゃんだって、美枝ちゃんだって、みんな駄目だ。みんなお猿だ』

かはいらし

と大笑ひ。小さい女の子は、赤い顔をして又私を見る。下ぶくれで本當にかはいらしい。

聲援す

『いやいや、美枝ちゃんのはお猿ぢやない』
と笑ひながら聲援してやると、

『あら……』
と、三人とも私の傍へ寄つて来て、

うんと

『教へて下さいな』
といひ出しました。

大もて

『もう、少し寒くなつたから、明日にしよう。をちさんがうんと教へて上げるからね』

と答へたので、私はそれから、をちさん、をちさんで大もていす。東京から別荘へ來てるんだとのこと。海は静に青く囁いて居ます。逗子の濱を東に、南のはては、稲村が崎。

平和

平和な一日の海岸は、かうして、毎日毎日くり返されて行くのです。左様なら。

文例

選手だった人へ

貴兄には、この頃は、ますます御清榮のことゝ存じます。

もう東京は櫻の蕾が、うす紅く、ふつくりとふくらんでゐます。向島もだんだん騒しくなつて來ます。

レースが始まるに間もないので、われわれは、毎日毎日の大練習です。去年は、敗北の恥をなめたから、今年はずせび、レコードを破つた勝利を占めようなどと、選手の元氣は實際、天を突くといふ程です。

スライディング式を持つて、今年のレースにのぞむのは、都下に於てわれわれだけですから、非常に心強い

感じがいたされます。みな貴兄御在校中に、一生懸命御盡力下さつて、その基礎ができたのですから、われわれは、オールを見る度にお噂をいたして居ります。

今日は、朝つから雨降りです。いま、合宿の窓に凭れて黙つて水面に見入つて居りますと、去年、貴兄が、舵を握つて、狂氣の如くに、オーラーを勵された、あの面影が、思ひ浮べられました。

あの時だつて、山岸君さへ、事故がなかつたら、きつと勝利だつたのに、實に残念でしたね。

今年こそは大丈夫ですから、御安心下さいませ。いづれ詳しい模様は、後便でお知らせいたします。近ければ御上京を願つて、應援していただきたいの

ますます

ふつくり

敗北

勝利

盡力

水面
見入る

面影

残念

大丈夫

文
例

六九

判讀

ですけれど、やはり、これも愚痴です。
 暇ひまでしたから、これだけ書きました。読み返さずに
 ポストに入れますから、御判讀ごはんどう下さい。
 なほ、御身ごんみは、くれぐれも御大切ごたいせつに。

中途退學をなせし親友へ

あたら
人生

壓迫あつぱくの重石おもしに、あたら、人生じんせいのはなやかな春はるは逝やきつ
 つあるとは知りながらも、やはり、學生がくせい々活せいかつは懐なつかしい温あたたか
 いものだ、君きみは、常時じょうじいつて居ゐられた。
 親したしい友ともの尠すくないながらも、君きみは私わたしには、本當ほんたうの兄あにのや
 うに思おもはれて居ゐた。いろいろと、こまかい事ことまで心こころか

本當
實際

ら親切しんせつに教おしへて下くださる、その慈愛じあいには實際じつさい涙なみだが出でる程ほど
 の事こともあつた。

春雨

手てを探たづねるやうに導みちびかれて、私わたしは四年ねんになつた。そし
 て君きみに——君きみに別わかれねばならぬ悲かなしさを味あじつた。

たぐる
浮世

春雨はるさめのやうに、情緒じやうじゆのゆかしい君きみは、君きみの四邊へんのサク
 リファエズとなつて、はては學まなびの道みちの長ながき長ながき絲いとを、殘のこ
 るとも無なく、たぐらんこの堅かたき心こころも捨すて、もう浮世うきよの硬かた
 い疎かろかな風浪ふうろうに、あやつらるべく出でられるのだ、行ゆかれる
 のだ。

不安

君きみ——君きみの心こころは、黒鐵くろがねのやうに固かたい、私わたしは人生じんせいの何者なにもの
 も君きみには少すこしの恐怖きょうふも、不安ふあんも與あへて居ゐない事ことも知しつ
 て居ゐる。だが、君世きみよの中なかは冷つたいものだ、といふことは忘わす

文
例

成功

頭腦

門出

活動

れて下さるな。
 私の老父は、人間の成功はその人の心がけによるものだといふ。又、學問なんて小學校をへれば澤山だともいふ、頭腦の古い老人の言葉も、私たちは聞いてやらねばなりません。君君はどうか、この言葉を信じてやうて下さい。
 私は君に別れる——それを悲しむ。しかし昔から勇しい武士の妻は、夫の死の門出を送つてすらも、よく涙を堪へた。まして、世の中へ活動しに行く、成功しに行く君を送つては、私は決して泣きはせぬ、顫へはせぬ、戦きはせぬ。君喜んで行つて下さい、勇んで行つて下さい。

社會

ちようど

過去

油斷

君はかつて、社會へ漕ぎ出る、最も新しい人は、春の歡樂から、秋の終結に一步を入れたものだといはれた事を記憶してる。
 君君のこれからは、ちようど、この秋の終結、即ち結果時代です、果實時代です。結果は、過去の價値を論じます、果實はやがてその花なり木なりの價値を定めます。忘れて下さるな、君のこれからは果實時代です、結果時代です。
 君、黄金のやうな果實を結ばうとする木、それには鋭い蟲がつきやすい。少しの油斷もなりませんよ。あれ、あそこにも、こゝにも、恐しい惡魔が、爪や牙をむいて狙つて居ます。

文例

呼號す

それから君君はたとひ、いそがしい利戰の巷に呼號して、高い名譽の臺と星と輝く冠とを得ても、どうぞ君の後から後からと、急いで行く私を見捨て、は下さるな。

小唄

・櫻が匂ふ頃でした。二人は、軟い緑の野に坐つて、雲雀の小唄を聞きながら行末は、かうあうと包みなく語つた、幼い私を忘れては下さるな。

横しまに

荒い雨が横しまに雨戸を打つ寒い日でした。火鉢を抱いて、諭されもし、教へられもした若い私を忘れては下さるな。

櫻の花は毎年咲く。咲く度に私を思ひ出して下さい。

木枯

木枯の風は毎年吹く。吹く度に私を思ひ浮べて下さい。

春風がゆるやかに漂ふ時、私は一人さびしく、あの野に立つて歌ふことでせう。

閃き渡る
くり返す

恐しい電が閃き渡る時、私は一人、あの窓に倚つて、君の言葉をくり返すでせう。

あゝもう、私は筆を止めますけれども、今一言！世の中は冷たい、冷たいけれども甘い。

君君おゝさらば、去り行くわが親しき友よ。

さらば

S 生より K 生へ
K 生より S 生へ

一、

腰辨こしばんとなつて二日ふたひ目だ。
親おやの爲ために、澤山たくさんの妹いもうとや弟おとうとの爲ために、灰色はいいろな窮屈きうくつなあの役やく所しよの一隅ひとすみの瑕きずだらけな古ふるテールへ、毎日まいにち毎日まいにち齷齪さくさくと通かよはねばならぬ身みとなつた。考かんがへて見れば情なさけない。希望きぼうも、抱負ほうふも、理想りさうをも打ち捨て、僅わずかの金かねの爲ために、自由じゆうと、平等びやうとうなる行爲かうかとを束縛そくそくせらねばならぬのだ。腰辨こしばんの味あじは冷つめたく、人生じんせいは苦にがい苦にがいものと知りながらも、そこへ喘あへいで行ゆかねばならぬ僕ぼくを、あはれんでくれ給たまへ

よ。

— S 生

二、

S 兄にいよ。
生活せいふつのため、に呪のろはれた君きみの運命うんめいを憐あはれむ。と同時に、犠ぎ牲せいとなれる君きみを尊たつとぶ。君きみよ。小生せうせいが申まをすまでも無く、キリストの十字架じゆうじやう上に、血ちを流ながしたるは、何人なんびとの爲ためなるや、御存ごぞんじの事ことと思おもひ候まうらふ。現代げんたい社会しゃかいの自我じがを尊たつとぶ感念かんねんはまゝ、極端きよくたんに走はせて、親おやや兄弟きやうだいを捨すてゝも、自己じこ理想りさうの影かげを追おはむといたし、居をり候まうらふふを。それを思おもへば、今度こんどの君きみの決斷けつだんは、實じつに美うつくしきものと考かんがへられ候まうらふ。と申まをして、小生せうせい自身じしんの境遇きやうぐうを省かへりみれば、誠まことにお恥はづかしく、いつとは

犠牲

自我

決斷

文
例

七七

利我

知らず、兩親の頭髮霜を加ふるに、自己の爲に利我の爲に、勉強せしめよ、と願ひ居り候ふよ。君よ、笑ひ給ふな。親の脛は固い。固いけれど甘く候。

隅より隅に

あゝ夜はすでに深く。初夏の生暖かき空気が、室の隅より隅に廣がりて、黒き柱にかゝれる時計は、ねむさうに十時を知らせ居り候。終ながら、君の健康を祈り、併せて健全なる君の書信に接するの日の近からむ事を待ち上げ候。——K 生

三

浮雲

腰辨になつてからもう六日になつた。秋空流れ行く浮雲の、それよりもなほ迅速に變り行

受付

相手
談笑す

く、人の心の憐さよ。

初の程は、恥しさと情なさで、時々思はずも書類の上、涙を落した事もあつた。また受付の窓口で、物を問はれて、惶てた事もあつた。が、もう馴れてしまった。閑のある時は、机の向の男と相手になつて、談笑する程あつかましくなつた。土色をした同輩の顔を、何とも感じなくなつた。

腰辨は冷くても、腹はふくるる。——S 生

四

僕は死なうと思ふ。

——S 生

五、

君驚かさせ給ふな。

死は易くして生は難しとやら申し居り候。死して花の咲くものに候ふか。先づ考へて見られたく候。君一人死して靈魂の快樂を求め候うても、母上や妹御たちは如何なさるゝおつもりに候ふぞ。路途に迷ひ給ふ親子を残しても、君は靈魂の満足の求めたきにや、君もそれ程のイゴイストにては候はざるべし。

— K 生

六、

願慮す

維持す

客観す

開拓す

K 君。

全く僕が悪かった。感情に走せて、一家の不幸を願慮するの閑が無かった。あゝ僕は、決して死なない。安心してくれ給へ。僕は、自殺せんとする苦痛は、現在を維持して行くよりも、更に苦痛であつた。

食はぬものゝ味は分らない。僕の境遇に居ない君が、僕の心の分らうわけが無いのである。

客観して透視せられる程、僕の單純なもので無い。多くはいはぬたい僕は、僕のさし向けられたる運命のまま行くのだ、それを開拓する事の出來ぬ男だ。夏になつた。夢を食つて生きてるのは、猿といふ獸ばかりださうだ。僕も活動する。きつとするよ。 — S 生

文

附

八一

慰藉す

S君

七、
 小生漸く安心仕り候。これからいよいよ君を慰藉し、君の味方ともなり、パートナリともなつて行く可く候。がその以前、僕をして偽なく、露骨に君を評せしめられよ。否現代青年の大多數に向つて評するを許されたく候。

高樓

成功
もがく

現代青年の多くは、階段なくして高樓に登らむ極みなき空に搖曳する雲を掴まんとなし居るには候はずや。而して徒に成功を急ぐ故に時機を待つを知らず。知らざるを以てもがき、もがくが故に思ふやうになら

煩悶す

逆境

ぢだんだ

哀憫
壓迫

す思ふやうにならぬ故に、世を嫌ふ。恐る。厭ふ。悲運なりと叫ぶ。煩悶する。死にたくなる。又彼等の多くは、浮華輕薄にして且つあわてものに候。客觀的を以てすれば、何でもなく候ふを煩悶だ煩悶だと吹聴いたし居る者に候。逆境だ逆境だと叫び候。をして沈著然として、世の中を悟らず、たゞ世の荒浪の恐しさに、ぢだんだを踏んで、自棄自棄を狂號する者に候。はては、小生の主人公を模擬して自殺し墮落し、漂零落魄故山に屍を埋め得ぬ身となり終るのに候。小生は、彼等の多くを思ふ度に、寧ろ哀憫の情に堪へず候。彼等は皆弱き人也。周囲の壓迫に堪へ得ざる弱き男に候。弱きは女女は弱きが故に美しけれど男

通弊

努力

不孝

は強くありたく候はずや。男は強ければこそ頼もし君は如何覺えらるゝや。君も今日までは現代青年の通弊に落ち入りし一人にて候ひき。君滾々として漲る悪運の濁流を漕ぎ抜ける程小生等の愉快はこれなく候ふべし。努力と活動との向ふところに光明はあり。行く途には美しい紅い花が咲き亂れ居り候。さらば君よ。

— K 生

故郷の父に

久々お無音に打ち過ぎ誠にご不孝の段々お詫の申し上げやうもこれなく候。父上には如何お暮し遊ばさるゝや日頃よりお風邪一つ引き給はぬこと故病氣な

やはり

所用
不思議

繁昌す

恩返し

相變らす

どにかゝらるゝ筈はなしと信じ候へどもやはりどうしても蔭ながら御案じ申し上げられ候。先日所用ありて銀座へ参り候ふところ不思議にも後より呼び掛くる男あるよりよく氣をつけて見れば數年前帳場をいたし居りし幸吉にて顔も姿も餘程相變り申し居り候。目下獨立して機械商をはじめ相當に繁昌する由にて餘程世間の信用もあり財産もできたるやうなるがせめて昔の恩返しせひせひ拙宅へお出でを願ひたいなどと申しおのれの昔を忘れざること今の世には珍しく感心いたして立ち分れ候。いづれ近日中には訪問する考に候。

幸吉の話によれば松造も東京に居る由なれど相變

しみじみ

好成绩

通勤

都合

折角
自愛

らすの飲んだくれ、どの店に行きても、一年とは勤め兼ね居るとの事に候。人に勝れし智もあり、腕もありながらと、しみじみ、いたましく存せられ候。

私の出で居る會社は、年々の好成绩にて、近頃など、まことに忙しく、歸宅夕飯をすませば、一時に氣抜けのせしやうにて、がっかり仕り候。しかし、幸にも體に障りはなく、毎日通勤怠らず候。間御安心下されたく候。

社長馬島氏も、私には殊のほか眼をかけて、御勵し下され候へば、萬事に都合宜しく候。父上お閑の折は、御禮の御手紙ども差し上げ置き下さるやう願ひ上げ候。

この頃は、夏より秋に移り行く、最も季候の悪しきときにて候へば、父上には、折角御自愛の程、專一に祈り入

り候。

いづれ母様へも、詳しくお手紙差し上げべく候へど、父上より宜しくお言傳願ひ上げ奉り候。

先づは、あらあら。頓首

歸郷を報ず

お母さん。私は、學校が今日から休になりましたから、明日朝の七時に上野を出る汽車で歸ります。

只今、その邊を歩いて、妹と弟へのお土産を買って歸つたところです。お父さんとお母さんへは何にもお土産はありません。

だけど、お母さんへは私の達者な身體、お父さんへは

達者

學校の通信箋の成績

今晚は、本當に、うれしくて堪りません。
明晩の嬉しさ楽しさに、今からもう眠らないんです。
とり急ぎ、先づは御通知まで。

成績

歸京を報ず

啓。君は常日口癖に、田園生活田園生活といふが、それも實際に来て見ると飽きてしまふよ。二三日の間こそ、山の景色も、林の眺も、廣々として居るものゝ、一週間と経たぬ間にも、肥料の香が鼻につく。
僕も、休は未だあるが、にぎやかな東京の空氣——人の動搖が急に戀しくなつたから、明日午前十一時、上野

とり急ぐ
田園生活

肥料
鼻につく

お土産

ゆつくり

事情

かねがね

手紙

著の列車で歸ることにした。

負ひ切れない程に持つて行く、僕の君へのお土産は何だかそれは著いてからのお樂だ。

明日の晩は、久しぶりでゆつくり語るにいいね。
下宿へ來る時は泊るつもりにして來給へ。

入學を報ず

拜啓。かねがね、貴下の御熱心なるお言葉これあり候へども、いろいろ家庭の事情のため、父母へも申し述べ兼ね、獨り煩悶いたし居り候ふところ、一兩日前漸く父の許を、早速準備にとりかゝり、今日萬事入學の手續を了し候、幸なるはなやかなる日が、これより私の身

發展

かたがた

わざわざ

に下りしかと思へば、嬉しく嬉しく堪らず取りあへず貴下まで御報知申し上げ候。
 私もこれよりは一層努力奮闘して、將來の發展を期すべく候へども、敬ひ親しむ貴下の折ふしの御諭こそ、何よりの力と存せられ候。
 先づは、入學のお知らせかたがた、今後の變らざる御引立願ひ上げ奉り候。頓首。

安著を報ず

拜啓。出發の際は、わざわざ折からの雨の中を停車場までもお見送り下され、嬉しく忝く御禮の極みにござ候。

乗客

いつしか眠氣ぞす

安著

夜行列車の殊の外乗客少く、車内はいと物さびしく、たい騷しき車輪の響のみ聞え、窓の外には闇また闇を累ねて眺むべくもなく、東京の空燃ゆるが如く焦げたるを、距り去るに従つて、私もいつしか眠氣さし、珍しくも、悉皆ねこんでしまひ候。腰骨のあたり痛きに氣づきて、漸く眼覺め候ふころ、既に宇都宮を過ぎ居り候ひき。

故郷の停車場には、弱きあかりの搖ぎ居り候。いつもの如く、姉と弟が迎ひに来て居てくれ、早速車を驅つて、只今無事に懐しき黒き門を入りしばかりにて、取り敢へず安著のお知らせまで、亂筆認め申し候。
 未だ夜は全く明け放れず候へど、故郷の山水、いよいよ

よ濃緑に書きたき事の數々あれどいづれ落ち著き次第詳しきお手紙差し上ぐべく候。不一。

出産を報ず

愚妻こと長らく御心配を忝うせしが今曉三時男子を産み落し候。日頃よりか弱き愚妻いかならむかと案じ居り候ふが幸に母子とも至つて壯健に候ふ間はいかりながら御休心下されたく候。

早々ながら何がなよき名もなきかと只今産床の妻や産婆など對手に打ち語らひ居るところに候。貴兄御智慧も候はばお開き下さるやう願ひ上げ候。まづは取り敢へず御報知まで。勿々。

か弱し
壯健
早々
報知

右返事

御内房無事御出産の由めでたきこと限りなく祝ひ上げ候。未だ見ぬ先ながら父君に似て丈夫におはさむ母君に似てやさしくおはさむなどと家内一同御噂いたし、打ち喜び居り候。

明朝早速參上にここにこせる貴兄の御顔拜見仕るべく候へど、お報知に接して嬉しさの餘り使に持して先づは取り敢へずお祝申し上げ候。別封は粗末ながら小生の寸志までに。

丈夫
にこにこす
寸志

入營を報ず

一

肝國
銘元

莊嚴

あらあら

謹啓。國元出立の節は萬事有難き御配慮に預り肝銘相忘れ申さず候。

今朝滞りなく入營いたし候ふ間、はかりながら御安必下されたく候。次便詳しく申し告げ候へども、軍營のすべてのもの何となく、莊嚴の感に打たれ陛下の御爲わが命も惜しからずと、殊更に深く覺えられ候。先づは御報知まであらあら申し上げ候。

末筆ながら、皆々様御壯健に渡らせらるゝやう、蔭ながら祈り上げ奉り候。不一。

二

次第

おぼつこ

すつかり

だぶだぶ

天皇陛下には誠に申譯もない次第だが、別るゝとなれば悲しいもんだ。

廿一になる今日までも、一所に暮した君に、あの汽車の窓に別れた時は、恥しいが、僕は涙が出た。人の心も知らずに、急しく走り出した汽車が憎かった。

後には年老つた母と、あの通りなおぼつこの妹きり頼むよ。

今日すつかり被服や何か渡されて僕も帝國の軍人になった。帽子も服もだぶだぶ大きい。二日してから練兵が始るんださうだ。

日頃
くれぐれも

母は本當にお頼みするよ。
君も日頃から餘り丈夫ぢや無いんだからくれぐれも、お身を大切にしてくれ給へよ。
いづれ詳しい手紙は出すけれども、取り敢へず入營のお知らせまでに。草々。

右返事

一、

拜呈。御手紙の趣めでたく御入營の由御本望に思はるべく、大慶のいたりに存じ奉り候。
これまでとは異り、總て嚴肅なる軍規の下に御起居

本望

肝要

昇進

自愛

居あそばさるゝ御事幾重にも御察し申し上げ候。
しかしながら、三箇月も経れば、頗る勤め易く相成り候ふ由につき、暫時の御辛抱肝要にごさ候。殊に貴君は、學校にあらるゝ頃より、兵式教練は御熟達のこと候へば、忽ち上官の眼に留りて、御昇進御疑これなく候。
我國の前途はますます多事、今後軍人の君國に盡すべきの機會は、甚だ多からむと存せられ候ふが、貴君もこの御心掛にて、御自愛、御奮勵の程偏に祈り奉り候。
頓首。

二、

お手紙頂戴した。

いよいよ
すつかり

いよいよ軍隊の人となつたね。何も君國の爲だ。すつかりやつてくれ給へ。軍服を着けた君の姿が眼に見えるやうだ。人は誰でも苦勞はせねばならぬ。苦勞は君國の爲にするを以て最も尊しとする。

引き受く

後のことは及ばすながら、僕が引き受けた。やつてくれよ大に。大に。失敬。

試験合格を報す

失敗
官報

去年の失敗で、君等に合せる顔もなかつたが、今年はね喜んでくれ給へ、漸く入學試験がバツスした。官報を見て、自分の名があつた時は、實際僕躍り出してしま

ちと
努力

つたよ。席順は、ちと大きな聲ではいへないが、まあ入學さへすると、後は自分の努力にあるんだから、安心だ。いつの間にか、部屋の前、梅が吹いて居る。君祝に來てくれ給へ。待つてるよ。

右返事

きつと
夢中

君の手紙で、僕も躍つたよ。今年も、きつと大丈夫だと思つて居た。試験前の君は、全く夢中であつたからね。君のお父さんやお母さんの喜は、どんなだらうねえ見えるやうだよ。

一兩日
つまらなし

僕も一兩日中にお祝の爲三升樽下げて參上しよう。
お互に、僕等の花は、これから咲くんだ。蕾で終つて
はつまらない。やらう、やらう。すつかり頼むよ。失
敬。

死去を報ず

藥石
出棺
佛事

拜啓。母、松村瀧事、長々病氣のところ、藥石その效な
く、遂に今朝午前一時死去仕り候ふ間、この段御通知申
し上げ候。
追つて、葬儀の儀は、明後四日午前十一時三十分自宅
出棺、日暮里正法寺に於て、佛事相營み申し候。敬白。

轉居を報ず

いよいよ
附近
なりなり
別天地
散歩

いつぞや、お話し申し上げたることこれあり候ふが、い
よいよ、昨日、表記のところへ轉居仕り候。
裏には、少しばかりの空地の候へば、菜など植うるに
よく、附近、いづれも大家の別荘なるより、をりをり、ゆか
しきパイオリンの音など漂ひ來るほか、やかましき汽
笛のうなり、電車の響など聞えず、全く、浮世を知らぬ別
天地の感、これあり候。その代り、萬便利は宜しく候は
ねど、廣々たる野の眺は、十分、この缺を補ふに足り申し
候。
何はなくとも、お閑の折は、御散歩かたがたお出で下

されたくゆるゆる御閑談伺ひたきやう愚妻よりも申し添へ候。勿々。

同返事

兼ねて、お話しはこれあり候へど、まさかと存じ居り候ふところ、本日突然御轉居のお手紙に接し誠に驚き入り候。

右の趣き早々お知らせ下されなば荆妻なりとお手傳に差し上ぐべく候ひしを、餘りの他人行儀却つて恨めしく存じ候。

いづれ參上ゆるゆるお話し申すべく候へど、とりあへず御挨拶まで勿々。

作文の點が悪いから

義兄さん。暫く御たよりもしませんでした。失禮いたしました。お變りもございませんか。この頃は姉さんから、さつぱり御手紙が參らないもんですから、父や母が大變心配して居ります。

私も達者です。今度の學期試験は、あまり成績が思はずなかつたので、内々心配してましたけど、漸く三番で及第しましたから、どうぞお喜び下さい。

けれども、どういふものか、作文の點が悪くて、父さんにも叱られました。義兄さん、どうしたら作文がうまく書けるんでせうね。

及第す

成績

さつぱり

若芽

こつちでは、この頃漸く雪が消えて山々が懐しい緑を浮べました。庭には若芽が吹きました。東京はもう櫻ですか。

私も東京へ行きたいです。左様なら。

右返事

三番で及第したつて。おめでたう。

父様や母様が、さぞ喜んでお出でだらう。こちらでも別段變つた事はないんだが、つひつひお手紙も上げなかつたんだ。お前から、よつくお詫を申し上げて置いておくれ。

作文の點數が悪いのは困るね。

點數

さぞ

つひつひ

下手

面倒

一朝一夕

文才

練習す

お前などは、まだ若いからいいけれども、文章の下手な者は、社會へ出てから、萬事に都合がよくない。やはり勉強する必要はあるよ。どうすれば、うまく書けやうかつてのは、甚だ面倒な問題だね。
文章といふものは、悟道の問題、趣味の問題であるから、一朝一夕には、どうすることもできない。
まあ、大家の書いたものを、よつく読んで見て、だんだんに文才を養つて行くさ。そして、時に當り、折にふれて、感じたこと、想ふたことを、そのままに、あらはす事を練習するんだ。決して情を偽つたり、言葉を衒つたりする事をしては、駄目だよ。
さうして、るうちに、文章を書くのが心からおもしろ

文

例

後廻し

要領

くなる。むづかしいことは後廻しにして置いて、初は何でも誰にでも明瞭にわかる文章を書き、要領を得るのに注意するがよい。

この「文章十講」を及第の御祝に上げるから、讀んで見給へ。後から姉さんも何か送るさうだ。

父上母上へ宜しく。左様なら。

不合格をしらす(親友へ)

君、僕はまた不合格だった。

「男子立志出郷關學若不成死不歸」だなんて、壯語して出京した僕の昨今甚だ振はない。

去年も、今年もだから、入學試験は、もう懲り懲りだ。

壯語す

懲り懲り

已むを得ぬ
我慢す

父へも母へも知らせない。
もう己むを得ないから、どつかの私立大學で我慢して勉強することしようさ。
同窓生にも誰にも知らせない。たゞ君にだけだから、なるだけ秘密だよ。左様なら。

入院を報ず

この間から、いろいろと心配をかけて、實際すまない。病氣は、依然變化はないが、醫師の勸告もあるし、どうせ、下宿にゐるんだからと思つて、當病院へ入院した。

昨夜、更くるまで、獨り眠りもやらず、寢臺の上に坐つてゐると、正面の窓のカーテン越しに、さびしい月の光

いろいろと
依然
どうせ

正面

反射す

想ひ出す

こつこつ

話し込む

が射し込んで薬瓶の紅い淀みが紫に反射してた。
國のことなんか想ひ出して妙な感じもしたが不眠
番の若い看護婦が、

「おやすみでございますか……」

つて、こつこつドアを叩いたので驚いて

「いいえ」

と答へる間もなく入つて来て、いろいろと話し込んで
しまった。一日遇つて百年の知己の如しとでもい
う。

話はそれからそれと進んで僕は眠られぬまゝ彼は
眠らせられぬため、一時は月おちて闇となった夜の再
び明けるまで語つた。

かはいさう
翻弄す

うとうとす

いんや

體温

彼はかはいさうな運命に翻弄されて居る。そして

おもしろい女だ。

朝になつて、僕がうとうとして居る間に枕元には、コッ
プにコスモスの花がさゝれて居た。

朝飯の時にまたやつて来て、

「昨夜は、お眠かつたでせう」

つていふから、

「いやいや。今晚も来て下されば有難い」

と返すと、

「参りますよ、おほほ……」

て笑ひながら出て行きました。

晝頭に、體温をとりに来たから氣がついて、コスモス

の禮を述べると、

『ええ、コスモスは、ようございますわね。』
そのコップの水で、この手紙を書いた。失禮。

退院をしらす

わづらはす
許可
いさゝか
せひとも

拜啓。久しく、貴慮をわづらはし候ふ段、謝し奉り候
小生、二三日來、身體全く舊に復し、體量十六貫を越ゆる
に至り、醫師の許可を得て、本日漸く退院仕り候ふ間、は
かりながら、御安心下されたく候。
就いては、本日午後六時より、いさゝか、退院の祝宴を
張りたく候ふまゝ、御多忙には候はめど、せひとも、拙宅
まで、御光來下さるやう願ひ上げ候。頓首。

梅見に誘ふ

すつかり

できることなら、自分の手で、堅い蕾を破つてやりた
い程に思つてゐた庭の梅も、昨日からの暖気で、すつか
り、花が咲いてしまつた。軟い春風が、一しきる毎に、堪
らない柔しい香を送る。どこの家のか、遠くで、鶯の啼
くのが聞える。

見頃

これでは、龜井戸なぞは、さぞ見頃だらうと思つて居
ると、天神の近傍に住んで居る友から、美しい花のたよ
りが來た。

飛花
紅雨

風に從ひて、飛花地に落ちて、紅雨霏々、見るが内に、薄
紅色せる、花の蕊は、敷かるゝなり。一步毎に、一株を

折々
のとけざ

植ゑたる梅は、薄く濃く、花又花と累りて霞といはんか、物足らなし、雲と呼ばんか、いよいよ惜し。折折はのとけき、鶯の聲すらするを如何にすべきぞ。薫に酔ひ、花に迷ひて、杖ひく人も多けれど、古の西行らしきの見えざるこそ恨み多けれ。

あゝ梅よ薫よ鶯よ。

何ぞかく我が心を動かすことの深きや。

何て我が吟懐を迷すことの甚しきや。ちようと明日は日曜だ。やんちゃん連のいひ草ではないが、ノートにはばかり嚙り付いて居るのも、能ではない。行かうぢやないか。今日の工合では、明日は保険つき晴天だ

吟懐
ちようど

工合
駄目

朝から出かけよう。ね。駄目かい。

すぐに使へ返事をくれ給へよ。

花咲く頃をしらす

肌觸りのいい春風が、氣兼をしてるやうに、つゝましやかに吹く。隣家の隠居の部屋からは、鶯の啼く、細い聲がする。

その聲がするたびに、僕の庭の白梅が、嬉しさうに紅らんで来る。

もう、大分蕾が大きくなった。満開までには三日とないだらうと思ふ。

今日のこの花曇り。晩でも一雨降つたなら、明日にも、白くゆかしくにはふだらう。

氣兼
つゝましやかに
紅らむ

風情

咲かぬうちにも風情はある。
閑だつたら、やつて來給へ。

花見に誘ふ

すてはつ

すてはてゝ身はなきものと思へども、花の咲く日は
浮かれこそすれ。

胸裡

西行の歌のげに眞に候はずや。君はこの頃如何に
覺さるる。小生は向島の花蕾めりと聞く日より上野
の櫻咲けりと聞く日より、胸裡春の氣分の漲る思のい
たされ、何と無く心浮き立ちて、どうしても黙つて部屋
に引つ込んで居られず候。

むごたらし

さるにても、二三日この方むごたらしくも小雨の絶

そぼ降る

えずそぼ降りて、外出もでき兼ね、咲きにはふ花の色を

いと

も眺めで、今年の春は過ぐるかといと心細く物足ら

どうやら

なく覺えられ候ひしを、今日の空模様にては、明日こそ
どうやら、雨も揚りさうにて、殊に、新聞の天候豫報は嬉
しくも晴とあり。邊に生き還りたる心ちのいたされ
て候。

外事
見ます

如何に候ふや。明日はせひ向島へお附合下さるま
じくや。逝く春のあはれさを、外事に見すまざるゝ君
ならざるを信じて、かくは御勧め申し上げ候。

風がそよそよ、櫻がさかり、オール持つ手に、花が散る
と、歌ひながらに河こぎ上る、ボートの音を聞きつゝ、小

どうしても

生は君の春の詩をどうしても聞してもらひたくかくこそ弟は走らせ候へ。

先づは御返事待ち上げ候。勿々

舟遊に誘ふ

實際

實際暑くて堪りませんね。窓を開いたつて戸をばづしたつてとてもノートなんかへ嚙りついては居られませんかよ。

たつた今

たつた今中川君加藤君安達君が打ち揃うてやつて来て今晚はちようと隅田で打ち揚げ煙火もあるさうだから小舟を一艘借りて納涼をやらうぢやないかとの話だ。君はどうだね。

納涼

川風

稀には川風にも吹かれて見ようよ。
三人とも君の返事を待つてるんだからすぐ使へ願ふよ。左様なら。

避暑に誘ふ

しみじみ

毎日毎日體を溶すやうな暑さが續くので僕はしみじみ東京が嫌になつてしまつた。

ちやうど

ところがちやうど暑中休で佐渡へ歸つた中川君から手紙が来た。中川君の宅は茂り合つた緑樹のうちに建つて殊に海岸に近いから夏を忘れて居る位だせひやつて來い宅の邸内が広いから暴れ次第海は遠淺だから朝から晩まで鹽水に漬つて居てもいいとの事

遠淺

徒歩
ゆつくり

とにかく

蝶として

だ。そして君も一所に件れてと書き添へてあつた。
一つ二人で無銭旅行的に徒歩を多くしてゆつくり
行つて見ようぢやないか。

佐渡には澤山の鏡山がある。日蓮上人の古跡があ
る。どうだい。せひ行かう。

とにかくいろいろ話したい事もあるから今晚にで
もちよつと来てくれ給へな。出ずに待つて居るから。

紅葉見に誘ふ

裏に聳ゆる満峯の紅葉爛として霜に飽き色は渥丹
の如くなり行きぬ。下を流るゝいさゝ川の水色燃ゆ
るばかりなるに風吹く毎に一葉一葉の散りけるが恰

群り戯る
詩人

詩想

散り敷く

相變らす
首つ引き

も紅き小鯉の群り戯るゝに似て秋ならではと詩人な
らざるわれとても折々見とるゝこともあり。

君よ。来ませ来ませ。秋は逝く。

月に冴ゆる紅葉の色霜に誇れる葉の囁き必ずや君
にはこよ無き詩想の湧き溢るゝを禁せざるべし。

散り敷きて累れる葉のさゝやき聲よ。

詩人來ませ、畫人來ませと叫び居る。(紅葉の精に代
りて)

雪見に友を誘ふ

相變らす下宿屋の三疊間に構へ込んで火鉢と首つ
引きをしてるんだらう。

落膽す

どうだい、雪がばかに降つたぢや無いかい。僕は今年はもう、雪を見ずにしまふのかと、落膽して居たんだよ。有難い、有難い。

やつぱり

北海道では「子供は雪の兒」といふ諺があるさうだ。廿歳になつても、親の脛を噛つて居る間は、やつぱり子供だ。雪の兒だ。雪の兒とまでは行かぬとも、兄弟位でなけりや駄目だ。

きつと
嫌な嫌な

上野の雪景色は、きつと美しい。その美しさも、ぼやぼやしてる間には、消えて、嫌な嫌な、もとの冬枯に還つてしまふ。

來給へ、一所に行かう、消えない内の雪を見に。すぐだよ、良いかい。(弟を使に)

久々

お互に、久々での慰勞休暇、どうです、明晩あたり、本郷座へでも行つて見ませんか。

評判

狂言は、艶物語ださうです。伊井の玉川清と、河合の丁山が、非常な評判です。幾度も幾度も、二人で演じた芝居だから、すつかり気が合つて、實際、芝居とは思はれぬ位ださうだね。それに、伊井がまた、今度は殊に念を入れて、大切の場に、一寸した繪を障子へ書くのに、一月も、何とかいふ畫伯の許へ通つたんだつていひますから、萬事研究的にやつて居る事です。

畫伯

一つ、息抜きに出かけませうよ。明日は朝つから待

息抜き

研究的

つて居ますから。

温泉場へ誘ふ

徒歩す

石塊の七里を馬車にゆられ更に半里を徒歩して、只今當宿へ安著、ほつと一息つきし處に候。

わざわざ

出發の際は、わざわざの御見送り、今更ながら有難く謹んで御禮申し述べ候。

不便

さて、當温泉場は、温泉宿は、三軒ほどこれあり他に、いさゝかの物商ふ店のみなれば、至つてさびしく従つて不便には候へども、四望のながめ誠に麗しく、目下は、名にし負ふ紅葉のまつ盛り、温泉宿の庭には、尾花女郎花など咲き亂れ、保養の地には、この上なきところと存せ

保養

正直

なかなか

出立

られ候。

殊に、他の温泉場とは異り、すべて正直にて、食物など暴利仕らず、なかなか親切にいたしくれ候。

小生出立のをりの御言葉もこれあり候、間南向の温水八疊を借り置き候。

水清くして、眺勝れ、湯の質の宜しきは、その試験表にても明なれば、早々御出で候へかし。

湯に入りては語り、出でては語り、心行くばかり、しみじみと語り、明さんを、たのしみに待ち居り候。

先づは取り急ぎ候ふまゝ、亂筆御免下されたく候。

文例

一三三

しみじみ

觀兵式拜觀に誘ふ

相變らず勉強かい。流石の僕も君には實際感心してしまふよ。

それはさうと明日は、そら八日で陸軍始だ。青山で毎年の通り觀兵式がね、それでさ兄の言葉がおもしろい「明日は忝くも大元帥陛下親らわれら軍人を指揮し給ふ。日本臣民として、光榮何物かこれに過ぎんだ。貴様も男なら一度はこの盛觀を拜んで置け。正服正帽でやつて來い」と。

入場券は、兄から貰った。陸軍大學席へ入れるんださうだ。

相變らず

觀兵式

指揮す

光榮

入場券

いひぐさ

行かうぢやないか。兄のいひぐさではないが僕等も男だ、一度はをがまねば大きな事はいへない。行かう、行かう。すく御返事。

學術講演會に誘ふ

拜啓。早速ながら、來る十五日、米町大黒座に於て小林博士、松村學士等の通俗講演會これあり候ふ由、タイムス新聞に相見え申し候。

演題は、いづれも多年の研鑽になる専門學に出で候ふ故、定めて有益のことと存せられ候。殊に小林博士の地方財政策など、なかなかの聽物の由に候。

早速ながら

研鑽

なかなか

せひとも
同伴

小生、當日はせひとも、傍聴に参りたく候へども、貴兄の思召は如何に候ふや。御同感に候はゞ、御同伴仕りたく、先づは御誘ひ申し上げ候。不一。

右返事

誘引
機先

啓。當方よりお誘引申すべくと存じ居り候ふところ、機先を制されて残念に候。

歸路
順路

小生は勿論大々の賛成にて、貴兄と御一所なれば、夜深けての歸路、闇の田畝を通るも少しもさびしからず、お蔭で安心して傍聴に参られ候。當日は順路なれば、小生よりお寄り申すべくにつき、お待ち居り下されたく候。勿々。

新年宴會に友を招く

めでたし

新玉の御慶、めでたく申し納め候。

冥途

門松は、冥途の旅の一里塚などと申しても、縁濃き松

翻々す

の間に、壽祝ふ日の丸の翻々するを見れば、どうしても

ちつとしては居られなく相成り申し候。

どうしても
何やかや

何やかやと申さずとも、新年の酒は大に飲むべく、新

年の餅は大に食ふべくと存せられ候。

就いては、本日午後六時より、拙宅に於て、飛んだり跳

ねたりの新年宴會催したく、貴兄も、せひせひお出席下

さるやう願ひ上げ候。

餘興は公平を保つため、席順に廻ることといたし候。

餘興

新年宴會
せひせひ

但し袴御着用のこと嚴禁にござ候
右御含みの上この手紙持參の使者へお返事相なり
たく候。敬具。

花の盛りに友を招く

じめじめ
希望
胸一杯に
人知れず
二三日來雨がじめじめと降り續きました。しかし私はそれを少しも苦痛には感じなかつたのです。苦痛どころか張り切れるやうなうれしい希望が小さい私の胸一杯に充み満ちて居たのでした。そして私は刻一刻に灰色から青青から紅と恥しさうに蕾を開いて行く庭の梅の樹を眺めては一人人知れず隠し切れない笑の唇に戦くのを感じました。

たうとう
スケッチ
句想
短冊

雨が残りなく揚つて生々した空氣が流れると春のやうな暑い太陽が輝いて梅の蕾はたうとうゆかしい香を放つて咲き競ひました。その愛らしさ神々しさつたら實際ふるひつきたい程です。
妹は得意になつてスケッチを始めて居ます。お祖父さんは白い髯を撫でながら頬に句想到つて居られます。やがて薄紅色の短冊が小枝につられる事です。
私はどうしてもこのまゝ黙つて一人で眺めて居ることができません。
梅が咲いた——梅が咲いた——来てくれませんか君。

せひせひ

そして二人で、酔ふまで、梅の香を味はうではありま
せんか。
待つて居ますから、明日はせひせひ。

右返事

天下の秋

一葉落ちて、天下の秋を知り、一輪梅咲いて、春のすで
に來れるを悟るとか申せ。梅の香に包まれて、君が詩
稿の、いかに、ゆかしがるべき。お招きに甘へ、明日は早
速參上、うらかなる君が南日の縁に、若き詩人の、春の
神秘を語るを聞くこそ、今よりなかなか、楽しき思の
せらるれ。

神秘

なかなか

菊のさかりに

丹青す

性來の花いちりとはいへ、小生老父、一日一杯夢中に
て丹青せし、自慢の菊、漸くものになりしと見え、美事に
咲きそろひ申し候。いやはや、老父の機嫌のよきこと、
闇の夜に黄金を拾ひし如くにて、本日は例の如く、早朝
より根株のまはりなど、頻に掃除を始め、只今、小生の歸
宅するや、早々、尊大人に、明日はせひせひお出かけ下さ
るやう申し上げよ、との嚴命、なかなかにもだし難く、早
速一筆差し上げし次第に候。尊大人お出で無くば、又、
小生の手紙の書きやうが悪いなどと、叱言をたまはり
候ふ間、御足勞ながら、御散歩かたがた、御立ち寄り下さ

いやはや

せひせひ

なかなか

散歩

出來はえ
我慢

れたく、くれくれも、小生より御願申し上げ奉り候。また、
た、も一つの御無理は、菊の出來ばえの悪しくとも、御我
慢なされ、せひ、お賞めに預りたきことにて、若しも悪い、
まづい、などと申さうものなら、それこそ後の騒ぎが思
ひやられ候。

先づは、勝手なる花の御案内まで。早々。

新築落成に人を招く

たてまへこのかた、一方ならぬ御配慮に預りしかね
て、新築中の別荘、一兩日前、萬事内部の造作を仕上げ、本
日、いよいよ引き移り候。

新築
造作

たりたり

お辭

いさゝか

御足勞

粗末なる建築ながら、流石新しきに心ちよきと殊に
四邊は野つゞき、原つゞきを、をり鳥よけに曳く、農夫
の鳴子の外、きゝたくも、電車の音など響かぬ静さ、に
誠に住みやすく覺えられ候。お世辭にはこれ無く候
へども、全く尊大人の場所柄、お指圖はうまいものと、今
更ながら感謝の念に堪へず候。

ついては、いさゝか心ばかりの落成祝いたしたく存
じ候。ふ間五日の夕頃までには、せひせひ、お泊り下さる
御つもりにて、御足勞下されたく、待ち上げ奉り候。
先づは、重ねての御願まで。頓首。

右返事

いよいよ御引き移り遊ばされ候ふ由めでたくめでたく祝ひ上げ候。早々の御招待これまた深く御禮申し上げ奉り候。五日には来るなといはれてもせひ参上するつもりにて待ち居りしところにて候ひき。

内部の裝飾など立派のことに候ふべし。それなくても近頃は、お身の上美しく、どうやら騒しき街を離れて、一日でも暮して見たく悴を説きつけ居る始末に候へば、餘り四邊の静さなど、御自慢下さらぬやう、今より御願ひ申し上げ置き候。呵々。

招待

いよいよ

立派

始末

悴の婚禮披露に人を招く

梅咲きにはひて、春うららかに候ふところ、皆々様、いよいよ御清榮賀し奉り候。

就いては、恐息京助儀、この度山口正造氏次女松子と婚約整ひ、来る十日、上野常盤花壇に於て、結婚披露の式を挙げ、爾後、愚老同様御懇親相願ひ申したきにつき、御方々の御來臨を請ひ奉りたく、御多用中誠に恐れ入り候へども、御夫人御同道遊ばされて、同日午後七時より同所へ御光來の程、幾重にも御願申し上げ候。先づは御案内まで、かくの如くにござ候。敬白。

うららかに

清榮

來臨

同道

案内

誕生日に友を招く

誕生日

君親といふものは有難いもんだね。生れた自分が忘れて居るのに明日はお前の誕生日だからお祝をするんだとの言葉だ。さういはれて見ると、しかも明日は三月の二日で、僕の生れた日だった。

とにかく

まあ、とにかく、そんなことはどうでもいい。ちよと庭の梅が咲いて居る。明日午後の一時に散歩がてらにやつて来てくれ給へ。君の外には、例の加藤のやんちやんが来る筈だ。やんちやんに、十八番の琵琶をうならして、二人で母のこしらへてくれる御馳走を食ふまでの話だ。きつと來給へよ。待つてるからね。

散歩

きつと

右返事

有難う。きつと行くよ。やんちやんに琵琶をうならして置いて、二人で食ふとは、ちと酷だね。行く、行く、行ってから、ゆつくりお祝ひ申し上げるんだ。

壽宴に人を招く

古稀 粗酒

愚父こと、今年を以て古稀の壽を重ね候ふにつき、聊か壽宴を兼ね、永年の御愛顧、御禮に及びたく、明後十一日、拙宅に於て粗酒差し上げたき次第に候へば、尊大人御多忙中甚だ恐れ入り候へども、御出駕を忝う致さるるやう、御願申し上げ候。

文

例

案内

先づは御案内まで。

鎮守祭禮友を招く

黄色く實つた稲の波は、すつかりと刈り入れられて私の故郷は、豊作を歌つて居ます。

都に居るやうな、はなばなしの建物は見られなくとも、ふつくりとした野の面に、ひつけられた自然の詩は、十分に私たちを満足さしてくれます。

私は、いま馬小屋の前に結つた、小さい垣根に腰かけて、心の行くまゝ、軽い秋風を呼吸し得る、幸福な呑氣な生活を續けて居ます。と、どこからともなく、太鼓の音や、里俗の神樂の響がする。

すつかり

はなばなし

自然
ふつくり

呼吸す

神樂

收穫

大した

下稽古

徒歩

素朴

あゝ、さう、さう、この十五日十六日が、例年の通りの鎮守の祭禮でしたつて。それに今年は、收穫がいいといふので、大した景氣です。

都からは、澤山な商人や、見世物が入り込んで、社近くに、高い小屋を構へてます。

今の音は、村の若い衆が、静な野の林の内、で、祭禮當日の下稽古をしてるのでせう。

君。ちようど今頃は、暑中休暇が、すんだばかりで、休講又休講で、學校はさう忙しくもないでせう。

私の故郷までは、汽車で五哩、徒歩三里、お祭を見ながら、遊びに來給へな。

素朴な――、しかし誠心から喜び祝ふ、田舎の祭典も

虚榮

太古

若旦那

きつと

一度は観て置くもんですよ。

社の周圍を取り圍んで、色の黒い、肉附のいい若衆と少しも虚榮といつたやうな、浮々した心のない、紅い装飾をした百性の娘等が、打ち交つて歌ひながら、おもしろさうに躍り廻るのは、どうしても、太古の、チグリス、ユーフラト附近の人類を、想ひ起させずには置きませんよ。

都から来た君と、若旦那といはれる私とが、僕をみんなは、真砂の若旦那と呼ぶその中に入つて、躍つたら、みんなは、どんなに喜ぶことか。

待つてるから、きつと來給へ。
食ふべき御馳走や、飲むべき酒はなくとも、自然に近

印象

せひとも

土産

世話

い人々が、笑ひ興する、その顔の印象と立つた旗に吹きすすむ田舎の風を味ふため、せひとも出かけて來給へな。

私は學問もせず、道徳も習はず、法律も解せない、氣樂な、自由な、幸福な、のびのびとした、青草のやうな、彼等の生活が、必ず、君の立派な土産となるを疑はない。

一つ明日は、私は、停車場まで、お迎に行つて居ようね。
私が都に居る頃は、一方ならぬ世話になつた君に、老父も、一度は遇つて、御禮をいひたいといつて居るから。
まづは、左様なら。

かるた會に人を招く

社用

ほつと

出戦

大元氣

今宵は、小さき星の輝きも、妙に新しき心ちのいたされ候。

正月に入りてより、社用邊に忙しく相成り候ふため、舊年の御禮、年始の御祝にも、参上仕らす、誠に誠に失禮申し上げ候。

今日漸く一日の休を得、ほつと一息入れ候ふ次第、御賢察願ひたく候。

就いては、小生家内中、これ幸と早速かるた會を始め、由にて、妹など大騒ぎせひ、大兄にも御出戦願ひ上げたく、待ち上げ居り候。

弟は、僕は山路さんと組んで、姉さんを敗してやるなと、今より大元氣にござ候。

おのおの

當方にては、おのおのの備を固めて、攻手を防ぐの準備、すでに居れば、早々御出陣下されたく、祈り入れ候頓首。(便を馳して)

親類を招く (車夫に持せて)

叔父さん。

私、いつかもお話して置きましたけれど、いよいよ父の許を得て、明日の晩友たちと一所に東京へ参ることになりました。

すぐ、をぢさんの處へあがりたいんですが、用意が忙しくて、とても参られません。

東京へ行くと、また暫くは遇はれないし、私ほんたう

文例

一四三

とても

いつか

せひせひ

に今更にお名残惜しいが――叔父さん来てくれませんか。今夜せひせひ。それから父も何だか御相談したいといつてますから。ね。待つてますよ。
お出での時は、一郎さんも御一所にね。左様なら。

歸朝祝に人を招く

客年
わさわさ

視察



留守中

謹啓。客年小生洋行の節は、遠路わざわざ御見送り下され有難く存じ奉り候。
この程漸く視察を終へ、一昨日汽船太平丸にて横濱へ着港無事歸朝仕り候ふ間憚ながら御安心下されたく候。
さて留守中種々御厚情を蒙りし御禮を兼ねいさゝ

か、歸朝祝の小宴相催したく候へば明日午後五時より上野常盤華壇まで萬障御差しくりの上御光駕を仰ぎたく、この段御案内申し上げ候。早々頓首。

床あげに人を招く

治療
漸次

啓。久しく御配慮を蒙りし愚弟病氣の儀、この程より佐藤醫學博士の治療を受けしに漸次快方に差し向ひ、只今にては殆ど病魔の影をとめざるほどに相成り申し候。

就いては来る十日床あげ仕りたく存じ候ふにつき當日は何の風情もこれなく候へども、かねがね病中も度々の御見舞をかたじけなうせる、謝禮の微志を汲

見舞
微志

文

例

れ御多忙中恐れ入り候へども、當日は午後六時より、御狂駕の程お待ち申し上げ候。 勿々。

右返事

御令弟永々の御病氣にて、御家内御一同さぞかし御心痛なされ候ふこと、推察罷りあり候。

さるを、近日御床上の御祝宴御催しの由、これ全く御一同様御看護の宜しきと、醫師の御手當の行届き候ふためと、御喜び申し上げます候。

なほ、當日は、小生にも出席いたすべき旨の御案内をたまはり、有難く謝し上げ奉り候。

御病中は、とかく御無音に打ち過ぎ候ひしに、御祝宴

にのみ列席仕るは、まことに御恥しき次第なれども、厚意に相背くも、却つて失禮と存じ候ふまゝ、當日は必ず、御厄介に參上仕るべく候。

先づは御返事までに。 不一。

大祭日に人を招く

拜啓仕り候。 申すまでも無きことながら、本日は忝

くも、陛下御誕辰を壽く天長の佳節に候ふ間、小生等

同窓相會して、微志祝宴を張り、いさゝか、一盞を傾けて、

以て聖壽の幾千代かくる萬歳を祝し、併せて櫻咲く大

和島根の隆盛を祈らむと存じ候ふにつき、貴兄にも萬

障御くり合せの上、明日午後二時より、上野精養軒へ御

隆盛
くり合す

厚志

壽く

看護
手當

さぞかし

とかく

足勞

足勞御會同下されたく願ひ上げ奉り候。
先づは御案内申し上げ候。謹言。

右返事

とこうなへに

奉祝

奇特
ひたすら

啓。御仰せの如く本日は天壽とこしなへに久しか
れと、八百萬の諸神に祈るめでたき晨にて我が帝國臣
民たるもの擧げて業を休み旭旗を掲げて奉祝の意を
表せざるものこれなく候。
をりから尊兄例により御奉公の御思召にて御祝宴
御設けの由まことに御奇特のことゝひたすら感心仕
り候。
恩命に従ひせひにも參上ともども陛下の賢明を稱

へ、今後の發展を祝ふべく候。
取り急ぎ御返答まで。不一。

急に人を招く

先方
貴意

返電

取り急ぎ書面を以て申し入れ候。
かねて貴君御依頼ありし件、只今先方より電報を以
て申し來り候ふにつき、貴意得たくせひ今晚中に御面
談申したきにつき、御足勞ながら拙宅まで御出で下さ
れたく候。
先方へ返電の儀は、それまで差し控ゆべく候。先づ
は取り敢へず亂筆のまゝ。匆々。

法會に人を招く

来る八月三十日は、亡父一週忌に相當り候ふにつき
いさゝか法會相營みたく、御大人は、亡父存命中、殊に御
懇親を願ひ候ふことに候へば、御多忙中、恐縮の至りに
ござ候へども、同日午後五時、せひとも御來駕、御焼香な
し下さるやう、この段、御願ひ奉り候。早々頓首。

醫師を招く

一、

昨日午後五時、歸宅早々頭痛いたし候へども、何程の

いさゝか

恐縮

せひとも

頭痛

しばしば

來診

非常に

大至急

事もやと、打ち捨て置きしに、今朝は耳鳴り、眩暈いたし、
嘔吐を催すことしばしば、體温三十八度に登り、苦痛誠
に堪へ難く、臥床いたし居り候。
御都合つき次第、早速御來診に預りたく、この段、御願
申し上げ候。匆々。

二、

先生。お母さんが、昨夜から、どうしたものか、非常に
お腹を病まれます。
未だ早朝のことですから、甚だお氣の毒でございま
すが、この使の者と一所に、どうぞどうぞ、お願ですから
大至急に御來診下さいませ。

文

例

大工を呼ぶ

昨夜の大暴風雨で、裏の垣根がすつかり打ち倒されてしまった。

晝からでも、閑を作つてせひ来てもらひたい。来る時は、序に見積つて板も持つてきてくれ。なるべく早い方がいい。

観月の宴を催す

今の人間は、いったい利慾利慾とおのれの物質的満足を追つてばかり居て、少しも風流などといふやさしい感念がないなどと、家の老父などは、始終いつて居る

癪に觸つてならぬ。

今宵はちようと満月だ。一つわが黨の意氣を示して、老人連を、あんぐりさしてやる爲に、僕の家で、観月會を開きたい。君忙しいだらうけれども、何とか都合してやつて来てくれないか。

酒を飲んで、歌を唄つて、でたらめな歌でも詠んで、あつばれ、若殿原の腕を見せてやりたいから。

待つてるよ。松谷君も、京村君も、澤見君も来てくれる筈だよ。

送別會を催す

貴兄、ますます御壯健に渡らせられ、熱心御勉學の由

すつかり

序に
なるべく

風流

あんぐり

都合

でたらめ
あつばれ

ますます

合格す

恩義

案内

手數

賀し上げ奉り候。

就いては、今般同郷の先輩山内君、高等文官試験に合格し直に、朝鮮統監府へ、仕官仕り候ふにつき、明後日あたり出發の豫定との事に候。

先輩の未來の榮達を祈り、且つ、今後の教導を乞ひ、なほ舊來の恩義に報いんため、明日午後六時より、上野精養軒に於て、いさゝか送別の宴を催したく候ふ間、何卒萬障御くり合せの上、御出席相成り候ふやう、先づは御案内申し上げ候。なほ、當方準備の都合もこれあり候ふにつき、御手數ながら、諾否の御趣御通知に預りたく願ひ上げ候。敬白。

夜學會を催す

秋風おもむろにそよぎて、空は晴れ、いよいよ燈下親しむべきの候となりました。

相變らず、専心御勉強の事でせう。

就いては、ちよつと御相談したいことがあるんです。が、どうでせう、友人たちが、皆一所に集つて夜學會を開き、共に共に勉強しようではございませんか。

ちようと、私の家が広いですし、大學へ行つて居る兄が、できるだけ教へて上げるといつて居ります。夜も長し、氣候もよし、かういふ時にこそ、本當の勉強はできます。

専心
相談

共に共に
ちやうど

無論
とにかく

無論御賛成下さるだらうとは思ひますが、とにかく御返事を一應頂きたうございます。

朝鮮へ行く人を送る

榮轉

いよいよ御榮轉朝鮮へ御赴任の由承りました。おめでたう存じます。

ちようど

私が申すまでもなく、朝鮮は新領土のことですから、かの地の人民は、皆疑懼の念を抱き、ちようど繼兒が親に對するやうな、ひがんだ行爲が多いさうです。それにまた、日本の役人も、本當の繼親根性で、随分邪慳なことをし、誠にいふに忍びんこともあるといふ話です。大兄には、決して左様の心配は萬々ございませぬが

役人

萬々

知らず

識らず

十分

ともかく

面會
ゆるゆる

屬僚には、萬に一つ無いとも計られず、よし最初から、こんな心情を抱かなくとも、愚民の弄し易きがため知らず識らずも、悪い行爲をするに至るものが出来ないと、も豫言し難いことですから、その邊のところは、十分の御注意あらせられたう存じます。そして飽くまでも我が 天皇陛下の海よりも深い御慈愛を、彼等に知らしむるやう祈り上げます。
ともかく、朝鮮は、風土氣候に大差ある事ですから、大兄、お身御自愛專一になされませ。
いづれ、御出立の折は、御見送り御面會ゆるゆるお話をいたします。
別封お恥しながら、御餞別の寸志までに。

年始状

めでたき

くり返す

屠蘇

一、年の始のめでたきを謹んで申し納め候。

壽く松ともろともに、幾千代かけて變らざる君の御幸を今更に、くり返しくり返し初日を拜して、お祈り申し上げ候。

二、

新玉は屠蘇一杯の御慶かな。

三、

初日の出
選外す

青葉がくれ
炎熱
さぞかし

謹賀新年。

初日の出神とゆかしく、瑞雲立ち罩めて、萬物還生す若水をくんで、腸を洗ひ、共に携へて、更に世の激浪と戦はむかな。

暑中の見舞

一日は一日より寒暖計の登り行きて、兩三日以前よりの暑さ、誠に堪へ難く候。私など野に連り、畑に廣がり、青葉がくれの田舎の一つ家において、すらこの通りなるに、萬丈の塵空に舞ひ、炎熱焼くが如しと聞く都なとは、さぞかしさぞかしと思ひ推され、御身様お障りもこれなきやと、かげながら、御案じ申し上げ居り候。い

文

例

かに渡らせらるゝや。

御身お忙しく候はずば、何はなくとも、當方へお遊びにお出で下されたく、夕月清き夏の空いろを、團扇片手に、夕顔棚の下よりながむるも、また心ちよきものに候。小生父母よりも、この儀申し添へいたし居り候。

この手紙認むる間も、流石、田舎の夜涼しく、開け放したる縁の青簾に風孕みて、螢一つ二つ飛び交ひ居り候ふぞ。

先づは亂筆ながら、暑中お見舞かたがた、御來臨お勧め申し上げ候。匆々。

右返事

夕月
夕顔棚
流石
飛び交ふ

叮嚀

終日

いやはや

厄介

様子

御叮嚀なる御見舞の御玉章誠に有難く拜讀仕り候。

まことに、我が住む都の昨日今日、譬ふるに物も無く終日九十度内外を上下し、宵風の涼しさなど、夢にも思はれず、日落ちれば、更にまた生温き空の漂ひて、寝ぬるも不可、起き居るも不可、静すれば汗額に溢れて散る。

いやはや、何とも申し上げやうもこれなく候。

しかし、幸に健康常の如く、家内一同も無事御安心下されたく候。

お言葉に甘へ、近日必ず参上、御厄介に相成りたく、今よりお願い申し上げます候。

晩食の後は、夜いたく更くるまで、二階の物干臺に寝そべり居る小生の様子、お察しお笑ひ下されたく候。

文

例

一筆お見舞のおかへしまで。頓首。

寒中の見舞

近頃は、東京も、雪こそ降らね、なかなかの寒氣にて、毎日、武藏野を吹き荒れし空つ風膚を刺し、電柱に鳥のとまりたるさへ、寒さの骨にしむを覺えさせ候。

御地あたりは、北の國のことなれば、昨日今日の寒氣も如何、御身様お變りもなきやと、窓打つ風の一しきること、に、打ち案じまるらせ居り候。殊に、御母上御妹御たちは、いかに渡らせらるゝや、御伺ひ申し上げ候。

當方は、一同無事、小生父母よりも、宜しく申し上げるやう申し添へこれあり候。

なかなか

空つ風

一しきる

當方

機嫌

先づは御機嫌御伺ひまで。勿々。

右返事

うれしき寒中の御見舞有難く御禮申し上げ候。皆様、ますます御安康の由、大慶至極に存せられ候。小生宅一同も、幸に變りたることもなく、消光まかりあり候。ふ問憚りながら御安心下されたく候。とはいふもの、北海道の冬ほど、みじめなものは、これなく、荒れ果てたる北海道の大原野に、うなりを發したる強風は、山となく、街となく、綿を積んだる白雪を、灰の如くに吹き飛ばして、寒氣は、これでも、未だか未だかといふ風に、骨も凍れと、きびきびと、壓へ附け、誠に誠に、南國の暖きに住み

ますます
安康

みじめ

きびきびと

文

例

炬燵

いはゆる

寒念佛

弱々し

めきめき

居りて、二月には梅が咲く、三月には櫻がにほふなどと
 樂み居る人々の夢にだも登らぬところに候。
 老父、子供など、戸の口三寸は外へ出られず、炬燵ばかり
 戀しがりて、間がな隙がな、もぐり込み居り候。
 寒さは寒けれど、また北海道のいはゆる、冷的趣味は
 格別のものに候。寒月、冴ゆる夜を、遠くに寒念佛の鐘
 を聞きながら、小唄歌ひて、高足駄ばき、さいさいと雪踏
 みしめて、湯に行く心ち、いふにいはれず、書くに書かれ
 ず候ふぞ。
 御地に居り候ふ節は、小生父も、いたつて弱々しく候
 ひしも、當地に來りて、寒風に晒されてより、めきめきと
 すこやかに相成り、始めの程こそ、それはそれは、雪を恐

早朝

わざわざ
雪景色

あらあら

末筆

れ候へど、目下は、小生などよりも、元氣よく早朝起き出
 でて、窓にかゝれる雪など、拂ひ除け居り候。
 別封、寫眞一葉は、御身様御父上に奉らむとて、小生父
 わざわざ寫させたる、當地の雪景色にて候へば、御父上
 様にお差し上げ下されたく願ひ上げ候。右端に立
 る人の手にはけるは、テツカイシと稱し、それはそれは
 温きもの、足にせるはツマゴといひ居り候。
 先づは、あらあら、お見舞のお返事まで。
 末筆ながら、御両親、妹御様たちへ、宜しく御致聲下さ
 れたく願ひ上げ奉り候。不一。窓に吹雪く雪の叫び
 を聞きながら。

洪水見舞

過日來 拜啓。本朝新聞の報するところによれば、貴地は過日來の大雨にて、非常の洪水に相成り候ふ由、まことに驚き入り申し候。

無難 貴家は、御地方高臺にある趣かねて承り候へば、御無難の事と推察仕り候へども、この節から御案じ申し上げ候。

何分にも 何分にも、遠方の事として、御見舞も意に任せず、焦心の思いたされ候。

焦心にも 先づは、とりあへず、書中を以て、御見舞まで。早々不一。

右返事

懇切 拜復。早速御懇切なる御見舞をたまはり、有難く、謝し上げ奉り候。

巨額 仰せの如く、本年は兩三年このかた、稀なる大雨にて、當地方の河川、いづれも、非常の出水諸所の堤防相破れ、材木などの流出せるもの頗る多く、損害も巨額に登り候。

がたがた 殊に、當市は、一町擧げて浸水せるもあり、かたかた、混雑甚しく候へども、幸にして、拙宅は高臺に候ふため、床下まで浸入せるのみにて、家内一同無事にござ候ふ間、御休神下されたく候。

混雑
追つて

先づは、混雑の折から、亂筆にて御禮まで。いづれ追つて詳しき模様は御報知申し上ぐべく候。頓首。

病氣の見舞

氣味
養生
くれぐれも

小生ながら、旅行仕り候ふため、少しも存せざりしが、兄には御風邪の氣味にて、御臥床の由に候ふが、今日如何に候ふや、お案じ申し上げ候。日頃より運動烈しき御身なれば、さしたる事もおはすまじく候はめど、風邪は萬病の基とやら、くれぐれもお大切に御養生專一に祈り上げ候。

小生目下甚だ多忙に候へど、一兩日中には手隙と相成るべく、その節は參上、親しくお見舞申し上ぐべく候。

受納

別封お粗末にてお恥しき品ながら、御見舞の御印に候ふ間、御受納下されたく候。勿々。

右返事

親切

御親切なる御見舞のみならず、御珍しき御品まで下され、何とも御禮の申し上げやうもござなく候。

出勤す

な、あに、小生横臥こそ仕れ、病氣と稱する程のことにてもこれなく、明日は役所へも出勤するつもりにて候ふ間、先づは御放念下されたく候。

用心

この頃の風邪は、まことに悪質に候へば、貴兄も御用心なさるべく願ひ上げ候。御内室様にも宜しく、恐妻よりも申し添へ候。

文

例

亂筆ながら、お見舞お禮まで。匆々。

火事見舞

いつに變らぬ懶者、今朝床の中にて新聞を見ておれば、ふと眼に入りしは、貴地火災、未だ延焼中との事にて、まことに驚き申し候。御貴宅は如何に候ふや、或は御類焼にてもあらぬかと、心も心ならず、未だ顔も洗はず、口も漱がす、寢衣のまゝにて、取り急ぎ御伺ひ申し上げ候。早々。

右返事

早速御見舞を恭しく、深く謝し上げ奉り候。いやはや

延焼
類焼

いやはや

烏有
風上
混雑

や、近年珍しき大火にて市街の半以上すでに烏有に歸し、家を失ひたる人々の、行先もなく迷ひ居る有様、あれとも、また氣の毒に候ふが、幸に拙宅は風上に候ふため、何の障りもこれなく候。間御放心下されたく、いづれ火災の状況詳しく申し上ぐべく候へども、知人類焼、只今甚だ混雑に候ふまゝ、あらあら申し述べ、御見舞御禮まで。早々。

父を喪ひし友に

一、

父君逝きましぬと聞きぬ。

心事

悲しきかも、悲しきかも。
われはたゞ、そをいひ得るのみ。君が心事を、おしはかりて、涙の盡くるあらず。

再び、あゝ、悲しきかも。

二

悪運

あゝ、今日はわれにして、いかなる悪運の日に候ふぞ去し月日、まことの子の如くに慈まれ、愛でられ教へられし、懐しき君が御父上の、悲しき訃を聞き候ふとは。人の世の常とはいへ、餘りに無情に候はずや。時くれば吹かねど花は散るものを、心なき山風の、晨に露を興へて、夕には、早や長き命を吹き散す。無情——無情と

無情

なかなか

笑顔

申すもなかなかに恐なる事に候。

あゝ、再びは、やさしき御笑顔を拜することもかなはざるべきか。御一家の御歎き、わけても、君が心の程げにいかばかりにかおはすべき。

君よ、悲しませ。泣きて候へ泣きて候へ。われもまた、涙の乾くまで泣きて候ふぞ。

早々御柩の前に参りたけれど、御存じの如き病臥の身お察したまはりたく候。

早々

荆妻不束ながら、お弔のお手傳に差し上げ候ふ間萬

不束

事お差圖下されたく候。

申し添へたきこと、山と盡さねど、情熱して、筆進まず

無念

たゞ、わが行きて、君と共に泣き得ざるこそ無念に存じ

文

例